

**平成 29 年度福島県  
大学生の力を活用した集落復興支援事業**

**田村市船引町瀬川地区調査報告書**

獨協大学地域活性化プロジェクト米山チーム

指導教員 経済学部国際環境経済学科 米山 昌幸

[目次]	ページ
1. はじめに.....	3
2. 田村市瀬川地区の概要.....	6
2.1. 地域的特性.....	6
2.2. 歴史.....	6
2.3. 行政区分.....	8
2.4. 公共施設.....	8
2.5. 主要道路.....	9
3. 瀬川地区の現状.....	9
3.1. 瀬川地区の人口.....	9
3.2. 瀬川地区の暮らし.....	12
3.2.1. 学校・幼稚園	
3.2.2. 子育て支援	
3.2.3. 教育に関する問題点	
3.2.4. 交通	
3.3. 瀬川地区の産業.....	18
3.3.1. 農業の概観	
3.3.2. 地域の特産品①—葉タバコ	
3.3.3. 地域の特産品②—エゴマ	
3.3.4. 地域の特産品③—有機野菜	
3.3.5. 地域の特産品④—肉牛	
3.3.6. 地域の特産品⑤—蜂蜜	
3.3.7. 直売所・アンテナショップ	
3.3.8. 商店・飲食店・温泉	
3.4. 遺跡及び文化財等.....	31
3.4.1. 無形民俗文化財	
3.4.2. 有形民俗文化財	
3.4.3. 有形文化財	
3.4.4. その他	
3.5. 耕作放棄地と空き家.....	38
3.6. 地域活性化支援団体.....	41
4. 瀬川地区の抱える問題と課題.....	43
4.1. 現地調査から得られた問題点.....	43
4.2. 取り組むべき課題.....	43
5. 課題解決のための提案.....	44
5.1. 地域住民の交流の場「コミュニティカフェ」を作る.....	44

5.2. SEGAWA マルシェの開催.....	45
5.3. エコツアーの企画・開催.....	47
5.4. SEGAWA フラワーロードの整備と「愛を込めて花を植えようプロジェクト」.....	50
5.5. 観光マップ・観光案内板の作成.....	52
5.6. 空き家や耕作放棄地の活用.....	55
5.7. 日常生活をサポートするボランティア活動.....	57
5.8. 獨協大学学園祭で瀬川産の農産物・エゴマ等の販促活動.....	60
6. おわりに.....	62

## 1. はじめに

2017年度、福島県の募集する「大学生の力を活用した集落復興支援事業」への応募にあたっては、全学の学生に向けて参加希望を募り、6学科から19名もの学生(英語学科1名、交流文化学科1名、経営学科2名、国際環境経済学科12名、国際関係法学科2名、総合政策学科1名)が集まった。そこで、2チームに編成し、県に申請し、2チームとも採択していただいた。

田村市船引町瀬川地区を担当する米山チームは、荒川桃花(学生代表:交流文化学科4年)、荒川薫(副代表:経営学科3年)、大久保智尋(副代表:国際環境経済学科3年)、鈴木翔大(英語学科4年)、浅野英里(国際関係法学科4年)、梶沼実沙子(同学科4年)、今井沙也果(国際環境経済学科2年)、川嶋亜実(同学科1年)、松江竜生(同学科1年)、吉田智晶(総合政策学科1年)の3学部6学科計10名からなるチームである。

米山チームは、11月18・19日に瀬川地区代表区長のは松本春治氏、田村市地域づくり推進員の佐々木正和氏、田村市役所協働まちづくり課職員らに同行していただき、図表1の実態調査行程表により瀬川地区の現地調査を実施した。

図表1 実態調査行程表

時程	行程
11月18日(土)	
8:34～9:32	東北新幹線 やまびこ127号(仙台行) 大宮駅発～郡山駅着
9:55～10:21	JR 磐越東線(小野新町行) 郡山駅発～船引駅着:船引駅にて田村市担当職員と合流
11:00～14:00	瀬川小学校にて文化祭(瀬川フェスティバル)視察:地域の方へのインタビュー
14:00～17:00	瀬川地区を一周しながら現地視察
14:20	・瀬川住民センター
14:35	～石沢多目的集会場
15:05	～新館竜泉寺
15:30	～大倉本町橋
15:55	～門鹿セブン
16:15	～瀬川住民センター
17:00～18:00	瀬川地区の現況説明 参加者:区長3名、前区長1名、民生委員1名、農業委員2名、チーム瀬川1名、地域づくり協議会1名、やってみっ会1名、市議会議員1名
18:00	のうか民宿「みちくさ」着
11月19日(日)	
7:30～8:00	民宿にて朝食
8:30	民宿を出発
8:40～11:30	農産物等の現地視察
8:40～9:40	・葉タバコ
9:50～10:50	・エゴマ搾油所
11:00～11:30	・ミツバチ養殖場視察
12:00～13:00	昼食を取りながら地域住民との交流会

13:00～14:00	酪農
14:10～15:10	レタス
15:25～16:00	JA 福島さくら「ふあせる たむら」 土産品の調査
16:53～17:19	JR 磐越東線(郡山行) 船引駅発～郡山駅着
17:30～18:22	東北新幹線 やまびこ 150 号(東京行) 郡山駅発～大宮駅着・解散

1 日目には瀬川小学校で開催されていた文化祭「瀬川フェスティバル 2017」の親子レクにボランティアとして参加した<sup>1</sup>。豚汁調理と餅つきに協力し、「やってみっ会」の方が手打ちされたお蕎麦と一緒にいただいた。児童や保護者の方々へのインタビューにより、地域住民の不安や要望を伺うことができた(写真 1)。

写真 1 瀬川フェスティバル 2017 へ参加、児童や保護者の方々との交流



<sup>1</sup> 田村市立瀬川小学校ホームページ「チャレンジ大成功 瀬川フェスティバル 2017 親子レク」(以下の URL)に、ボランティアとして参加したことを取り上げてくれている。  
[https://tamura.fcs.ed.jp/blogs/blog\\_entries/view/492/c5ae11a1fb7d95ac3bc9e5960829e7?frame\\_id=220](https://tamura.fcs.ed.jp/blogs/blog_entries/view/492/c5ae11a1fb7d95ac3bc9e5960829e7?frame_id=220)

瀬川地区を一周して現地視察した後、瀬川住民センターに各区長、民生委員、農業委員、チーム瀬川、地域づくり協議会、「やってみっ会」、照山成信市議会議員の皆様にお集まりいただき、瀬川地区の現況説明を受けた(写真 2)。2 日目には農産物等の現地視察を実施した。タバコ農家、エゴマ搾油所、日本ミツバチ養蜂場の視察、昼食を取りながら地域住民との交流会、山の傾斜地での肉牛畜産を営む酪農家、レタス・菜の花の有機栽培農家、田村市農産物直売所 JA 福島さくら「ふあせる たむら」、アンテナショップの視察などを行った。

現地調査によって瀬川地区の現状を自分たちの目で見て、地域の抱える問題を肌で感じることができた。チームのメンバーは、住民の生の声を聞くことで地域の課題を自分事として受け止め、地域に愛着を持つとともに、自分たちに付託された熱い想いを肌で感じ取って帰ってきた。また、部外者である自分たち大学生の考えていた「地域活性」と、地域住民の方々が望む「地域活性」には大きなギャップがあることに気付いて、地域の抱える問題にきちんと向き合っていなかったことを痛感して帰ってきた。現地調査から戻って、メンバーは瀬川地区の住民の熱い想いに応えるべく、授業時間の合間に何度もミーティングを行って、本調査報告書をまとめた。

写真 2 瀬川住民センターにて地区の現況説明を受けているところ



本調査報告書は、事前調査と現地調査にもとづいて、瀬川地区の抱える問題点を明らかにし、そこから瀬川地区として取り組むべき課題を抽出し、課題に対してメンバーが提案を出し合い、議論を重ねて 8 つの提案にまとめたものである。これらの提案の中から、重要性、緊急性、実現可能性に鑑みて優先順位を付けて、翌年度の実証実験につなげたいと考えている。本報告書にまとめた提案が地域住民の皆さんが望む方向性の提案になっていることを期待している。報告書の構成は以下の通りである。

まず、第 2 節で現地調査に入る前の事前調査を中心として、瀬川地区の概要をまとめている。第 3 節では現地調査でのヒアリング調査に基づいて瀬川地区の現状についての考察をまとめている。第 4 節では、2 節、3 節の考察を踏まえて、瀬川地区が抱える問題を列挙し、そこから我々が取り組むべき課題を抽出した。そして第 5 節では、メンバーが意見を出しあっ

て議論を重ねてまとめた 8 つの提案をしている。

## 2. 田村市瀬川地区の概要

### 2.1. 地域的特性

瀬川地区は、田村市<sup>2</sup>の北西部、田村市船引町の北部に位置し、船引町の中心部より北東へ 7km ほど離れ、二本松市と隣接している(図表 2 を参照)。面積は、約 17.73km<sup>2</sup>、標高 400m 前後の丘陵地である。また、おおむね東側には移ヶ岳(標高 994.5m)が位置している。村域は阿武隈高地に位置し、山がちな地形である。

丘陵地の大部分が森林であり、低地の部分については、田畑の耕作地である。瀬川地区の中央を移川(1 級 河川長さ 49.5km)がおおむね東西方向に流れ、これに紫川が大倉で合流し、阿武隈川へと注がれている。瀬川とは、この地方の地形から付けられた名前で、移川、紫川の美しい流れが山間部のわずかに開けた平坦地を流れる様を表しているという<sup>3</sup>。

### 2.2. 歴史

1889(明治 22)年 4 月 1 日、町村制施行により、石沢村・新館村・門鹿村・大倉村が合併し田村郡瀬川村が発足した。1955(昭和 30)年 4 月 1 日、船引町・文珠村・美山村・移村・芦沢村と七郷村の一部(堀越・遠山沢・永谷・柗山・角沢)と合併し、改めて船引町<sup>ふねひきまち</sup>が発足し、このとき瀬川村は消滅している。2005(平成 17)年 3 月 1 日、大越町・滝根町・常葉町・船引町・都路村が合併して田村市が発足し、田村郡より離脱した。現船引町には、船引地区、文珠地区、美山地区、瀬川地区、移地区、芦沢地区、七郷地区、要田地区の 8 地区がある。瀬川地区の変遷表は図表 3 の通りである。

図表 3 田村市瀬川地区の変遷表

1889(明治 22)年 4 月 1 日以前	1889(明治 22)年 4 月 1 日	1955(昭和 30)年 4 月 1 日	2005(平成 17)年 3 月 1 日以降
石沢村	田村郡瀬川村	田村郡船引町	田村市船引町
新館村			
門鹿村			
大倉村			

<sup>2</sup> 田村市の情報は以下の URL を参照。

田村市ホームページ

<http://www.city.tamura.lg.jp/>

田村市ホームページ「田村市の特性」

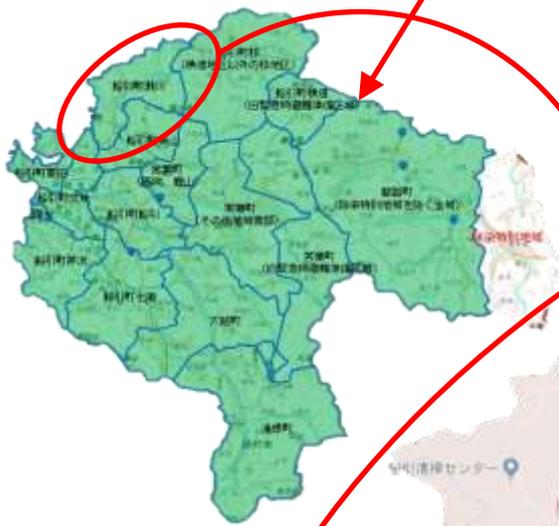
<http://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/2/soumu-tamurasi-tokusei.html>

<sup>3</sup> 逸見克己監修・集落支援員編集「遺跡や伝説など—過去からの送りもの—瀬川地区」(平成 28 年度集落支援事業)瀬川地区区長会、2016 年、2 ページ参照。

図表 2 田村市と船引町瀬川地区の位置



[出典]福島県ホームページ「県内市町村地図上検索」(以下の URL 参照)  
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01010d/koho-chizu.html>



[出典]田村市の除染実施状況  
<http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/tamura-201608.html>



### 瀬川村の行政区分上の位置

図表 4 は、1889(明治 22)年 4 月 1 日の町村制の施行により以下の 1 町 28 村が発足した田村郡の行政区。現在は、郡山市(紫)、田村市(赤)、三春町(桃)、小野町(橙)となっている。瀬川村は 26 であり、田村市の北西の角で三春町と接している

図表 4 田村市瀬川村の行政区分上の位置



### 2.3. 行政区分

瀬川地区は門鹿、大倉、<sup>かどしか</sup>新館、<sup>にいたて</sup>石沢の 4 つの行政区で構成されている。行政区分としては「瀬川地区」とは田村市船引町の以下の大字の住所を指している。

図表 5 郵便番号

石沢	963-4431
新館	963-4436
門鹿	963-4434
大倉	963-4435

### 2.4. 公共施設

瀬川地区の公共施設には、瀬川出張所、瀬川小学校、瀬川駐在所、瀬川郵便局のほかに、集会場として利用できる施設として、瀬川住民センター、門鹿公民館、大倉多目的集会所、新館多目的集会所、石沢多目的集会所がある。さらに、住民が利用できる運動施設として、瀬川運動場、瀬川屋内運動場、旧瀬川中学校体育館、瀬川小学校体育館、各地区(石沢地区を除く)のゲートボール場がある。

#### ●瀬川住民センター

瀬川地区の住民が集まって会議を行ったり、手芸など同じ趣味を持つ人が同好会の活動を

することなどに使用されている(写真3)。現地調査に際も、ここで地区の説明を受けたり、交流会を行っていただいた(写真4)。

写真3 瀬川住民センターの展示



写真4 瀬川住民センターでの交流会の様子



## 2.5. 主要道路

主要道路として国道349号線、県道50号線が通っている。Google Mapを使って瀬川地区を行政地区ごとに切り出した図表1を見ると、国道349号線が船引町の中心から北に向けて伸びており、門鹿→大倉→新館を通過して、二本松市に抜けている。国道349号線から新館で分岐した県道50号線は石沢を東に抜けて、隣の田村市北移・上移を経て、双葉郡葛尾村に入り、浪江町へと続いている。

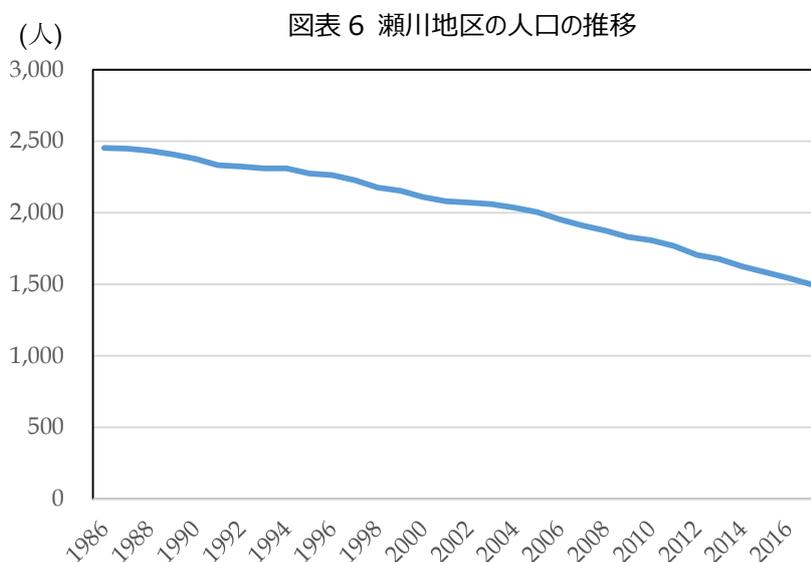
## 3. 瀬川地区の現状

### 3.1. 瀬川地区の人口

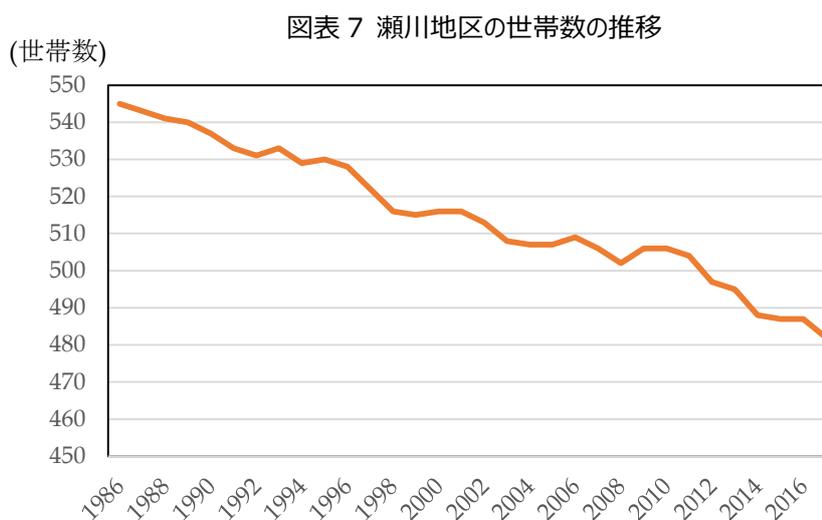
ここでは、田村市よりご提供いただいた『住民基本台帳(外国人含む)』のデータに基づいて、瀬川地区の人口について見ていく。図表6より、瀬川地区における2017(平成29)年11月1日現在の総人口は1,501人であり、男性が732名、女性が769名である。行政区分でみると、門鹿地区が241名、大倉地区350名、新館地区432名、石沢地区478名である。1986(昭和61)年以降の人口の推移をみると、1986(昭和61)年2,453人であったものが、2006(平成18)年には2,000人を切って1,954人となっており、東日本大震災後も同じトレンドで人口は低下を続けている。

図表7により、瀬川地区の2017(平成29)年11月1日現在の総世帯数は482世帯であることがわかる。また、瀬川地区内でさらに区分していくと門鹿地区が78世帯、大倉地区が111世帯、新館地区が139世帯、石沢地区が154世帯である。1986(昭和61)年以降の世帯数の推移をみると、1986(昭和61)年545世帯であったものが、2012(平成24)年には500世帯を下

回り 497 世帯となり、人口と同様に減少は止まらない。



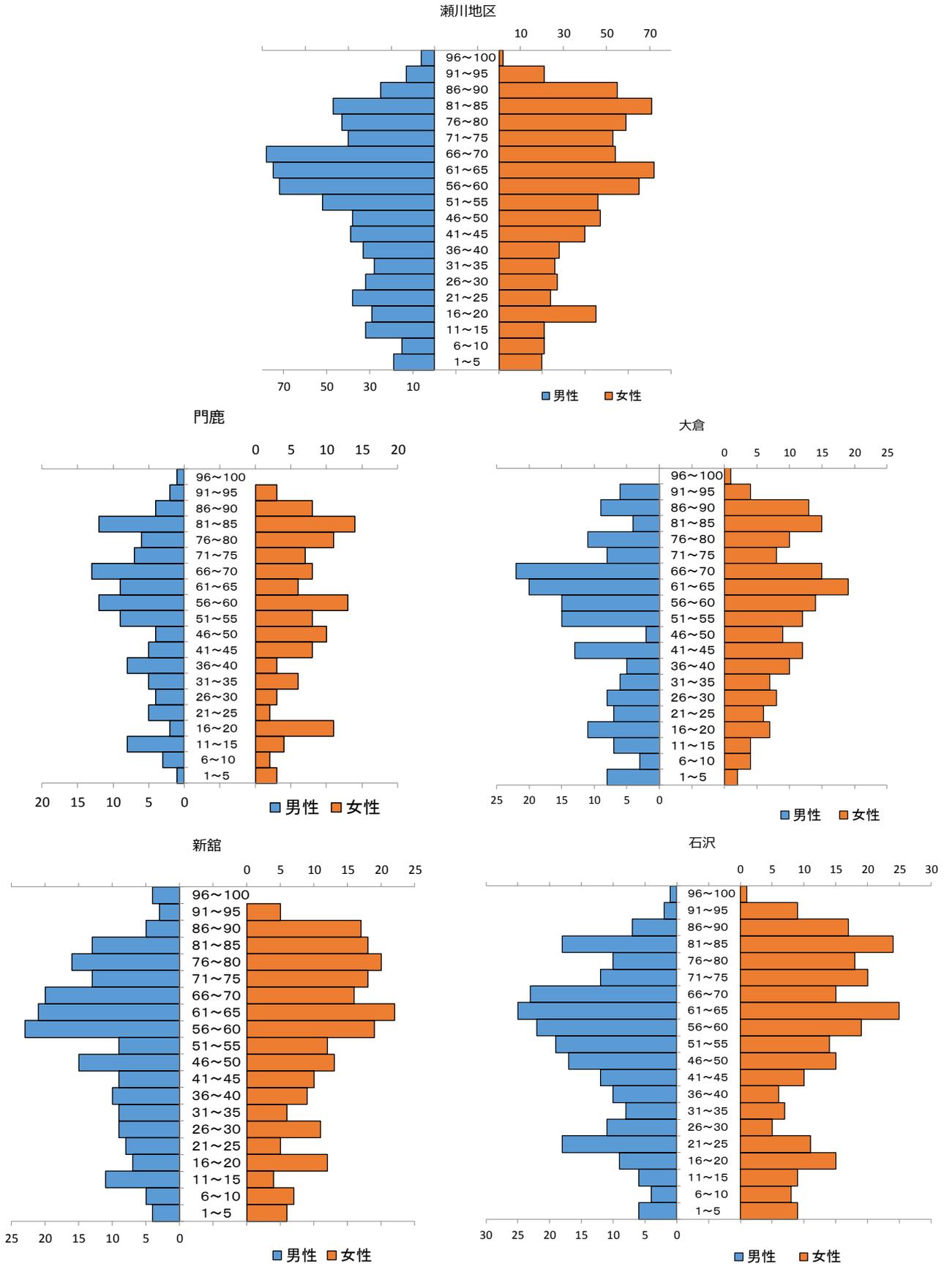
[出典]「瀬川の人口及び世帯数の推移」『住民基本台帳』より作成。



[出典]図表 6 に同じ。

図表 8 は、2017(平成 29)年の瀬川地区における年齢及び性別単位でみた「瀬川地区人口統計表」から瀬川地区全体と 4 行政地区の 2016(平成 28)年の人口ピラミッドを図示したものである。瀬川地区全体の人口ピラミッドは壺型をしており、年齢が下に行くほど人口が少なくなっている。では、男性 754 名、女性 797 名の計 1551 名となっているが、女性は特に 55 歳以上の年代に多く分布している。男性は 71 歳以上になると急激に少なくなっている。1947(昭和 22)～1949(昭和 24)年の第 1 次ベビーブームは 67～69 歳にあたり、人口が多くなっているが、1971(昭和 46)～1974(昭和 49)年の第 2 次ベビーブームは 42～45 歳にあたるが、これはほとんど人口ピラミッドから読み取れない。

図表 8 瀬川地区と4行政地区の各人口ピラミッド



大倉を除く3地区では16～20歳の女性が比較的多くなっている。この直接の要因はわからないが、この年齢の女性が地区に留まって出産してくれれば、出生数が増えていく可能性はある。

人口、世帯数が低下の一途をたどっているだけでなく、高齢者世帯が増加していることも問題である。図表9は地区内の高齢者世帯数と一人暮らし世帯の数である。どの地区も半数近くが一人暮らし世帯となっており、日常生活や健康面についての不安が多い。

図表9 瀬川地区高齢者等世帯数

区分	門鹿	大倉	新館	石沢	合計
高齢者世帯	23	23	34	36	116
内一人世帯	9	9	16	14	48

[出典]現地調査の際に、提供していただいた資料より引用。

このままの流れでいくと瀬川地区から人がいなくなる可能性は非常に高い。今後の瀬川地区の課題としては現在、瀬川地区で暮らす人々の生活環境の改善と外部からの移住者や訪問者を増やし、瀬川地区に現在いる定住者の外部への人口流出を抑制して、定住人口の維持とQOL(Quality of life)の向上に努めていくことが急務である。

## 3.2. 瀬川地区の暮らし

### 3.2.1. 学校・幼稚園

#### ●田村市立瀬川小学校<sup>4</sup>（田村市船引町新館字軽井沢 746）tel:0247-84-2218

国道349号線と浪江・三春線の分岐点の平地に位置し、学校から南東には秀峰「移ヶ岳」が望むことができる。1873(明治6)年、石沢地区の長久寺を仮校舎として開校し、2018年度創立145年になる伝統校である。現在の校舎は1967(昭和42)年に建設され、1990(平成2)年に東校舎を改築し、2006(平成18)年に内装をリニューアルした。2011(平成23)年3月に発生した東日本大震災により校舎の一部が損壊したが、2013(平成25)年8月、校舎大規模改修工事が竣工し、床・壁の内装改修、サッシ窓、FFストーブ、水洗トイレ設置と教育環境が整備された。

全校生徒はわずか36名(2017年度の卒業生は5名)で、全教師数は10名。また、1、2年生以外は先生1人が2つの学年を受け持っている。ご家庭の事情によって、瀬川地区以外から瀬川小学校に通わせている家庭もあれば、瀬川地区に居住しているが船引の方まで通わせている家庭もあると聞いた。瀬川地区における出生率は減少傾向にあり、その影響を受けて児童数は年々減少しており、瀬川小学校は合併されるのも時間の問題、と住民は危機感を募らせ

<sup>4</sup> 田村市立瀬川小学校(以下のURL)を参照。

<https://tamura.fcs.ed.jp/%E7%80%AC%E5%B7%9D%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1>

ている。図表 10 を見ると、2012 年生まれは多いものの、その他の年は低迷している。

図表 10 瀬川地区未就学者数

	門鹿	大倉	新館	石沢	合計
2011 年生まれ	1	1	2	1	5
2012 年生まれ	3	3	3	4	13
2013 年生まれ	1	2	2		5
2014 年生まれ		2		5	7
2015 年生まれ		1	4	2	7
2016 年生まれ		2	1	4	7
2017 年生まれ		1			1
合計	5	12	12	16	45

(注)2018 年 4 月に小学校に入学するのは、2011 年 4 月 2 日から 2012 年 4 月 1 日の間に生まれた子供。「2011 年生まれ」の中には、早生まれで 2017 年度に小学 1 年生になっている子供も含まれているかもしれないが、それ以外の子供は 2018 年度に小学校に入学となる。

[出典]現地調査の際に、提供していただいた資料より抜粋。

●田村市立瀬川幼稚園（福島県田村市船引町新館字軽井沢 746）

2 年保育で定員 60 名の幼稚園。福島交通バスの新館バス停から 152m の場所にある。1990(平成 2)年に瀬川小学校の東校舎を改築した際、同時に幼稚園も隣接されたが現在は休園中である。今のところ再開する見込みはなく、現在瀬川地区には幼稚園はない。

瀬川地区に該当する幼稚園がないため、この地区に居住している未就学児の多くは、船引にある幼稚園まで通っている。送迎に係るご家族の負担はかなり大きいと思われる。

●田村市立瀬川中学校（福島県田村市船引町新館字軽井沢 1074）

福島交通バスの瀬川中学校バス停にある中学校。創立年度は不明であるが、2009(平成 21)年に田村市船引中学校と統合されて、廃校となっている。学校の跡地は、震災の際に避難所としても使用された。現在も跡地はそのままの形で残されているが、利用方法などは明確にされておらず、改築予定などもない。

2009 年に瀬川中学校が統廃合となったため、瀬川地区に居住する中学生の多くは、現在船引中学校に通っている。通学に要する時間はバスで 10～15 分程度である。

3.2.2. 子育て支援

●子育て支援センター

親同士や子供同士の交流の「場」として「楽しい子育てのお手伝い」をするために設けられた施設。子育て講座やお悩み相談なども積極的に実施し、悩みや育児への不安を抱える人たちにとって心をリフレッシュさせるための集いの場となっている。

#### ●行政における補助等

- ・妊娠中の医療費を助成：妊娠4か月から分娩の月までの保険診療の自己負担分を全額助成している。
- ・子供たちの健やかな成長の支援：虫歯予防として、幼児を対象に検診時のフッ素塗布（集団）及び歯科医院で行うフッ素塗布（個別）に係る費用を助成している。
- ・出生祝い金：新生児の出生に対し、祝い金5万円を支給している。
- ・子供の医療費の助成：0歳から18歳まで、保険診療の自己負担分を全額助成している。
- ・保育料の負担：3歳児以上の市内公立保育所と公立幼稚園の保育料・入園料を無料化している。
- ・子育て支援奨励金：保育所等に入所していない3～5歳児までの児童を対象に、教材費等の購入支援を実施している。

### 3.2.3. 教育に関する問題点

#### ●小学校の存続問題

地区の住民が集うことができる「瀬川フェスティバル2017」のような大切な地域コミュニティの場を提供するものとして「瀬川」の名称を冠した小学校は極めて重要な役割を果たしていると感じた。瀬川小学校は地域の将来を担う子供の数を象徴する地域コミュニティの象徴的存在である。その瀬川小学校がなくなるということは地区の最後の砦を失うに等しい。何とかして、この瀬川小学校を存続させることができないか、早急な検討と対策が必要である。

#### ●保護者の抱える問題

- ・子供の送迎について：道路が狭い、歩道がない、暗い等の理由から学校や習い事からの送迎が必須だと考えている保護者が大多数であり、子供の送迎が保護者の負担となっている。
- ・子供の遊び場について：室内で子供の遊べる場所がない。
- ・子供の預け場所について：緊急の際に子供を預かってくれる場がない。
- ・習い事について：瀬川地区にある習い事はピアノのみであり、それ以外の習い事をした場合は他の地区まで通っている。学区外登校をして入りたい部活に入れる保護者もいる。
- ・大学進学に伴う若者流出について：瀬川を出た後に大都市圏の大学へと進学する子供も多いが、地元で専門知識を生かせる場がないために、大学卒業後に地元に戻ってくる子供の割合は少ない。

### 3.2.4. 交通

#### ●自動車为主要交通手段

主要道路として国道349号線、県道50号線が通っている。東日本大震災以降、国道・県道

は大型トラック等の交通量が増大している。

現在の瀬川地区の方々の主要交通手段は自動車である。父が軽トラック、母が軽自動車、息子がワゴン車というように1人1台所有しているのが瀬川地区のスタンダードであった。また、主要道路は国道349号線、県道50号線であり、自動車の交通量も多い。しかし、細い道に入るとほとんど自動車は通らず田んぼ道や畑道との境目が曖昧な道路が多くあった。

### ●公共交通機関<sup>5</sup>

瀬川地区には福島交通が運営する路線バスも走っているが、1時間～1時間半に1本というような運行間隔であり、朝の小学生の登校時以外はほぼ使われていないといってよい。図表11が瀬川地区にあるバス停の時刻表である。

図表 11 瀬川地区バス停の時刻表

出発地	行き先				
	船引駅前 方行	移車庫方 面行	ひじ曲方面 行	新館方面 行	落合(葛尾 村)方面行
瀬川局前	6:56	19:33	14:59	7:36	7:48
	7:35		17:49		10:48
	16:02				12:38
					15:58
					18:35
大倉	6:56	19:33	14:58	7:35	7:48
	7:36		17:48		10:48
	16:03				12:38
					15:58
					18:35
新館	6:54		15:01		7:50
	7:33		17:51		10:50
	7:59				12:40
	9:24				16:00
	14:59				18:37
	16:00				
瀬川住民センター	6:53	19:36	15:02		7:51
	7:32		17:52		10:51
	7:58				12:41
	9:23				14:41
	12:23				16:01
	14:58				18:38
	17:48				

<sup>5</sup> 田村市の公共交通機関は、以下の URL を参照。

田村市ホームページ「公共交通のご案内」

<http://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/4/koukyou-koutsu.html>

福島交通株式会社

<http://www.fukushima-koutu.co.jp/bus/>



が懸念されていた。

そこで、2002(平成14)年度に行政で「船引町中心市街地活性化基本計画」が策定され、「循環交通システム」への取り組みが計画され検討がはじまった。路線バス等の利便性の低下、商店街への客足の低下を打開するために「新多目的交通システム」の導入に向けて、2004(平成16)年に「システム導入検討委員会」などが設置され、2006(平成18)年1月に「船引らくらくタクシー」の実証試験運行開始、4月に本格運用開始した。

「船引らくらくタクシー」を利用するには、現金での利用料の取り扱いはしていないため、利用券取扱所で事前に購入する必要がある。瀬川ではファミリーハウスねもと、三部商店、佐々木商店、松本酒店、中谷百貨店、マルキンで購入できる。図表12には船引らくらくタクシーの時刻表が掲載されているが、予約は運航時刻の30分前に締め切るとのことである。

図表13には、車両別利用人数割合が出ているが、瀬川・美山を運行している北部線エリア2の利用人数割合は24.6%であり、瀬川だけで考えると更に低い数値になる。また、年代別利用人数割合を見ると、60～90歳代の利用が80.5%を占め、とくに70歳代が44.3%と非常に大きな割合を占める。これは、自動車免許の返納を行って自動車を自ら運転しなくなったお年寄りが、生活の足として利用するケースが多いことをうかがわせる。

図表13 車両別及び年代別利用人数割合



#### ●道路・自家用車に関する問題点

今回の現地調査で浮かんできた問題点は、以下の3つである。

(1)狭い道路が多く、事故がある。

まず、道路の狭さが挙げられる。国道349号線や県道50号線といった主要道路は広く整備もされているが、山道や田畑と隣り合った道が多い。事故が多発する場所に新しいガードレールが設置されていた。他にも田畑と隣り合って整備されていない道路は多くみられた。

(2)自動車が主な移動手段であり、自分で車を運転できなくなった時の移動手段を不安に感じている。

(3)道路を走っていて車を駐車して休憩できるような場所、施設が少ない。

### ●公共交通機関における問題点

まず、路線バスの問題点は利用者が少ないことである。ほとんどの人が自動車で移動するため、小学生の登下校による利用で主に使われているようだった。また、中学校はスクールバスがあるので、利用していない。今回のように現地調査として外から人が来たとしても、1時間～1時間半に1本という割合でしか運行しておらず非常に不便であり、路線バスのニーズに十分に答えられていない。公共交通機関はある程度の運行間隔が維持されて、ようやく利用者のニーズに応えられるが、赤字路線になれば運行間隔もあいて、そのことが更に利用客離れを招くという悪循環に陥ってしまっている。

一方、路線バスに替わる新多目的交通システムとして「船引らくらくタクシー」という仕組みが期待されて導入されたが、あまり地元の人に普及していない。「らくらくタクシー」のことについて聞いてみたが、あまり利用していないという答えが返ってきた。現地の方に不安に思っていることを聞くと、さらに歳を取って自動車を運転できなくなったときに、買い物や用事があるときに自由に動けなくなることだと言っていた。

現地に住んでいる高齢者が将来の生活に不安を抱えているのは問題である。路線バスもあまり利用されていないので、登下校のみの小学生用のスクールバスに切り替え、経費の一部をらくらくタクシーの宣伝や利用料金に回してみてもはどうだろうか。

### 3.3. 瀬川地区の産業

ここでは、瀬川地区の農業について概観したのち、現地調査2日目の11月19日(日)にヒアリング調査に訪れた農家の方々を取り上げて、瀬川地区の産業について考察する。

#### 3.3.1. 農業の概観

瀬川地区の基幹産業は農業である。この地区の特産品として葉タバコやエゴマが挙げられる<sup>7</sup>。以前は稲作や養蚕も盛んであった。認定農業者<sup>8</sup>は4名である。新たな取り組みとして地域特定野菜の産地形成化を図り、農産品のブランド化を推進している。

以下は2015年「農林業センサス」を用い、瀬川地区の農業の特徴について述べていく。瀬川地区における農林業の経営体数は132となっている(図表14)。さらに農業、林業ともに全てが家族経営体となっている。

---

<sup>7</sup> 葉たばこが収穫量で福島県全体のおよそ36%を占めている。収穫量は船引地区では約700tとなっている。

<sup>8</sup> 認定農業者制度とは「農業経営基盤強化促進基本構想に示された農業経営の目標に向けて、自らの創意工夫に基づき、経営の改善を進めようとする計画を市町村が認定し、これらの認定を受けた農業者に対して重点的に支援措置を講じようとするもの」である。農林水産省ホームページ「認定農業者制度について」(以下のURL)参照。

[http://www.maff.go.jp/j/kobetu\\_ninaite/n\\_seido/seido\\_ninaite.html](http://www.maff.go.jp/j/kobetu_ninaite/n_seido/seido_ninaite.html)

図表 14 農林業経営体数

新旧市区町村	農林業 経営体	組織	農業 経営体	組織	林業 経営体	組織
		経営体		経営体		経営体
福島県	53,623	969	53,157	759	2,721	224
瀬川村	132	—	131	—	4	—

[出典] 「2015年農林業センサス」 j307-27-c1-001.xls(以下の URL よりダウンロード)より抜粋。  
[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat\\_infid=000031510842](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat_infid=000031510842)

131 ある農業経営体の中で主業農家数は 17 となっており、その他は準主業農家、副業的農家である。このことから、ほとんどの農家が兼業農家であることがわかる。さらに、農業従事者の年齢層が非常に高い(図表 15)。65 歳以上の高齢者の割合は男性が約 77%、女性が約 69%である。

図表 15 年齢別農業就業人口 (自営農業に主として従事した世帯員数)

瀬川村	合計	50 歳未満	50 歳～64 歳以下	65 歳～74 歳以下	75 歳～84 歳以下	85 歳以上
男(人)	82	7	12	20	32	11
女(人)	109	7	27	28	36	11

[出典] 「2015年農林業センサス」 j307-27-c3-012.xls(以下の URL よりダウンロード)より作成。  
[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat\\_infid=000031510882](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat_infid=000031510882)

また、瀬川地区の経営耕地面積規模別経営体数は、耕地面積が 1.5ha 以下の経営体が全体の 93.6%を占める(図表 16)。

図表 16 経営耕地面積規模別経営体数

計	経営 耕地 なし	0.3ha 未満	0.3～ 0.5	0.5～ 1.0	1.0～ 1.5	1.5～ 2.0	2.0～ 3.0	3.0～ 5.0	5.0～ 10.0	10.0 ～ 20.0
131	—	1	39	66	17	—	5	2	—	1
100%		0.7%	29.7%	50.3%	12.9%		3.8%	1.5%		0.7%

[出典] 「2015年農林業センサス」 j307-27-c2-003.xls(以下の URL よりダウンロード)より作成。  
[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat\\_infid=000031510847](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat_infid=000031510847)

農家の販売規模の差がかなりある。農産物を生産するが販売はしていない経営体は 26 軒もある(全体の 19.8%も占める)一方で、中には 1500～2000 万円、3000～5000 万円も販売している農家も 1 軒ずつある(図表 17)。

図表 17 農産物販売金額規模別経営体数

計	販売なし	50万円未満	50～100	100～200	200～300	300～500	500～700	1,500～2,000	3,000～5,000
131	26	70	7	13	8	4	1	1	1

[出典]「2015年農林業センサス」j307-27-c2-004.xls(以下の URL よりダウンロード)より作成。  
[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat\\_infid=000031510848](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500209&tstat=000001032920&cycle=0&tclass1=000001077437&tclass2=000001077396&tclass3=000001093235&tclass4=000001093316&stat_infid=000031510848)

「販売目的の作物の類別作付(栽培)経営体数と作付(栽培)面積」を見ると、水稻の作付経営体数が最も多く 101 である。その次に作付の多い種が工芸農作物で 13 の経営体が作付しているが、これは「たばこ」の作付農家ということになる。

### 3.3.2. 地域の特産品①—葉タバコ

#### 葉タバコ生産の現状

現在、瀬川地区で葉タバコを作付している農家は 12 軒である(うち 1 軒は 2018 年には作付を辞めることを決めている)<sup>9</sup>。葉タバコ農家は 2 軒にヒアリング調査を行った。葉タバコの品種は、のす手間がかからない「バーレー種」と、のす手間がかかるが葉巻などの高級たばこの原料となる「松川葉」がある。1 軒目にヒアリング調査に伺った佐藤謙司氏は、バーレー種を生産しており(写真 5)、2 軒目にインタビューに伺った鹿股勝俊氏は、葉をのす作業工程があって手間がかかる松川葉を生産している(写真 6)。バーレー種は昔から今もやっている人は多いが、松川葉は瀬川地区で 12 人いる中で松川葉を生産しているのはこの鹿股氏ただ 1 軒となっている。

写真 5 バーレー種を生産する佐藤謙司氏



<sup>9</sup>「2015年農林業センサス」では「たばこ」の作付農家数が 13 であったので、それ以降 1 軒が作付を辞めていると見られる。

写真 6 松川葉を生産する鹿股勝俊氏



以前は専業で栽培していた農家もあったが、現在ではほとんどの農家が他の農作物の栽培や建設業と兼業している。理由としては、葉タバコの生産だけでは大した収入源にならず、トラクターや栽培小屋の保守管理などで 300 万円以上かかってしまい採算が合わないことや、定年退職した後、年金だけでは生活していけないからということが挙げられる。

瀬川地区で生産されている葉タバコは県内の須賀川市に卸され、九州に送られ製造されている。松川葉という品種では 1kg(300 枚)あたり 2800 円になる。葉タバコは契約栽培で、耕作面積に基づく収入なので収入は安定している。30 年前までは特産物として船引町が葉タバコ販売数日本一で約 45 億円稼ぐほどであったが、今では山形県など他の生産地に追い抜かされてしまっている。理由としては、農家の後継ぎ問題や東日本大震災での福島第一原発の事故による放射能汚染などが挙げられる。

葉タバコ農家で一番問題視されているのは、労働者についてである。瀬川地区内で葉タバコを栽培している農家のうち最年少者でさえ 60 代前半であり、ほとんどの経営者が高齢者ということや後継ぎがないことが問題になっている。そのため、病気が理由で栽培をやめていく経営者もあり、使用されなくなった畑(廃作地という)は荒地になってしまっている。後継者がいない問題については、葉タバコの生産は大した稼ぎにならないことや、葉タバコの栽培は 1 人ではできない上に技術を要するという理由がある。

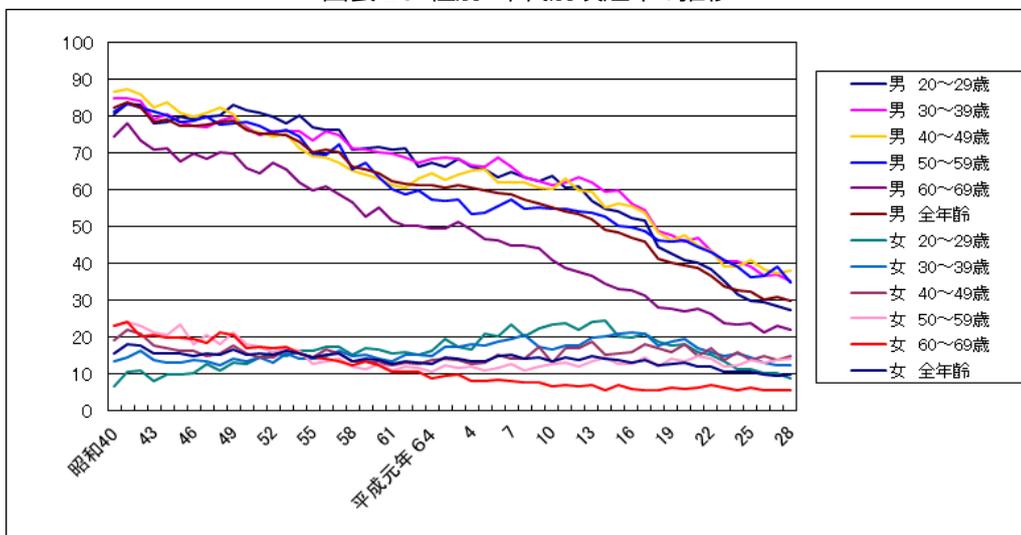
### 葉タバコ生産の問題点

生産についての問題はまず、葉タバコの生産の大変さがある。葉タバコを出荷させるためには、収穫後に乾燥させ専用の袋に入れるが、乾燥した葉が割れてしまわないように整った環境の中で自然乾燥と除湿機を使用し、乾燥させていく。また出荷用の専用袋の重量が 18kg にもなり、肉体的にも容易な作業ではない。

他にはタバコ自体の需要の低下が挙げられる。近年、図表 18 からも分かるように、日本の喫煙率が増税や健康被害への懸念から低下している。瀬川に関わらず、葉タバコ生産自体が全国的に低下している。このような社会環境を考えると、今後、葉タバコの市況が回復する

ことは考えにくく、葉タバコは公定価格で出荷・取引されているため、収益増加も見込めず、高齢化とともに廃業が増えていくことが予想される。

図表 18 性別・年代別喫煙率の推移



[出典]厚生労働省の TABACCO or HEALTH「最新たばこ情報」(以下の URL)より引用。  
<http://www.health-net.or.jp/tobacco/product/pd090000.html>

### 3.3.3. 地域の特産品②—エゴマ

瀬川地区にはいくつかの特産物があるがその中でもエゴマ油が発祥の地として有名である。瀬川地区にエゴマ生産者は 15 軒ある。瀬川住民センターに隣接するエゴマ油の搾油所で、瀬川地区でエゴマを生産している橋本公一氏・恵子氏ご夫妻に話を伺った(写真 7、8)。橋本ご夫妻は 2 反歩の作付を行っており、船引町有機農業研究会にも所属している。

写真 7 瀬川地区でエゴマを生産する橋本公一氏・恵子氏ご夫妻



写真 8 エゴマ油を搾油しているところ



写真 9 エゴマの葉っぱの塩漬け



エゴマはシソ科の1年草で高さは約1メートルまで成長する。原産地はインドや中国南部と言われ、日本では福島、宮城などの東北地方、中部地方から関東の冷涼地で栽培されている。田村市を含む阿武隈高原エリアにおいても「じゅうねん」と呼ばれ人々の食文化を支えてきた。田村市内で生産されるエゴマは無農薬無化学肥料で生産されている。

葉は青じそに似ていて独特な香りを持つ。殺菌効果を持ち、生のまま、漬物、茶など様々な形で食べることができる<sup>10</sup>。エゴマの葉っぱを塩漬けにして(写真9参照)、おにぎりに巻いて食べても美味しいという。種子は白種と黒種がある。白種は黒種よりもやや大きく殻が硬い。黒種は白種よりも脂肪の含有量が多い。そのため搾油に向いている。エゴマの種子はすりつぶして和え物に混ぜたり、つぶさずにプチプチとした食感を楽しむこともできる。

エゴマ油は種子から絞った油で  $\alpha$ -リノレン酸<sup>11</sup>が一般的な植物油よりも多く含まれているのが特徴である。エゴマ油は発がん性物質の抑制やダイエットに効果があるとされており、瀬川地区はテレビで紹介されたことがあるほどである<sup>12</sup>。この油には焙煎搾りと生搾りの2種類がある。焙煎搾りは焙煎したエゴマを使用したもので香ばしい香りが強いのが特徴である。生搾りはマイルドな味と香りが特徴である。エゴマで健康を保つためには1日小さじ1杯の摂取が推奨されている。

<sup>10</sup> cookpad「 $\alpha$  リノレン酸 No.1 エゴマの葉ジュース」(以下の URL)参照

<https://cookpad.com/recipe/2788381>

<sup>11</sup>  $\alpha$ -リノレン酸は体内で作ることが出来ない必須脂肪酸の一つである。田村市のエゴマ油には  $\alpha$ -リノレン酸が60%以上含まれている(一般社団法人日本食品分析センター試験結果)。 $\alpha$ -リノレン酸の効果としては、脳細胞の活性化、免疫機能の改善促進、動脈性疾患の予防、脳梗塞・心筋梗塞などの予防、アレルギー性疾患の改善、動脈硬化・高血圧などの予防、発がん性物質の抑制が挙げられる。

<sup>12</sup> 2015年7月14日放送のNHK「あさイチ」で田村市のエゴマが取り上げられたことについては、以下のサイトで紹介されている。

「エゴマの実力！特産地の福島・田村市「地元じゃこうやって食べてます」

<https://www.j-cast.com/tv/2015/07/14240191.html?p=all>

LivedoorNEWS ホームページ「福島県イチオシの「エゴマ油」がスゴイらしい」

<http://news.livedoor.com/article/detail/10348114/>

エゴマは白種を絞ると1キログラム当たり300cc、黒種を絞ると1キログラム当たり330ccほどの油を搾油することができる。エゴマ油は300ccで3000円ほどで売られており、高額である。

エゴマはサラダやお茶、サブレ、焼酎に使用される。また、商品として「エゴマ」、「練じゅうねん」、「エゴマうどん」、「田村エゴマこんにゃく」、「エゴマ油」が生産されている。田村市役所から提供していただいた資料によると、2017年度には瀬川地区では15軒の農家がエゴマを栽培している。

### ●田村市のエゴマ文化の歴史

エゴマは昭和初期から山間地における自給自足生活では日常的に食べられてきた作物である。田村市のエゴマ文化の発展のきっかけを作ったのは、船引町で有機農業、自然養鶏を営んでいた村上周平氏である。田村市では炒って食べることが主流であったエゴマは、1997年に韓国の村を訪ねた際には油の自給のために栽培されており、感銘を受け翌年1998年に搾油機を輸入しエゴマ油の自給を始めた。同年には「日本エゴマの会」を発足、さらに1999年には「第1回エゴマサミット」を開催し、生産者だけでなく研究者、消費者にもエゴマへの理解を深めてもらえるよう努めた。

東日本大震災後「日本エゴマ」の会の後継組織として「一般社団法人日本エゴマの会・ふくしま」が発足し、信頼回復に努めつつ、「エゴマの学校」を開催し、栽培の指導にも取り組んでいる。

### エゴマに関する問題点

エゴマ栽培の特長は、肥料や消毒が必要ないため、あまり手間を掛けずに栽培することができることにある。しかし、コンバインで収穫するとエゴマに傷がつき、酸化が進み品質が悪くなってしまうので、できるだけ手作業で収穫するのが良いとされている。しかし、収穫の時期が1週間しかない。そのため収穫期の人手不足に直面していることと、生産者の高齢化によって大規模栽培は難しいのが現状である。

また、福島県では南会津町でもエゴマは生産されているし、福島県はもとより全国の各地で、エゴマを特産品として推進している地域が存在するため、この地域のエゴマをどのようにして普及させていくかという点も今後の課題の一つである。

### 3.3.4. 地域の特産品③—有機野菜

#### ●有機農法を行うレタス農家

有機農法で野菜を栽培する「いせや農園」を営む伊藤博之氏にお話を伺った(写真10)。伊藤氏は第1回世界土壌微生物オリンピックの施設園芸部門で金賞を受賞した実績を持ち、レタスだけでなく、ミニトマトや菜の花、キュウリなどを季節ごとに栽培している。

伊藤氏は全ての野菜を有機農法で生産している。有機農法で栽培された野菜というのは独特の苦みが少ないそうだ。栽培した野菜は東京のスーパーや郡山のスーパーなどに出荷している。差別化を図るために、EM 菌に黒蜜、米ぬか、魚粉、窒素リン酸カリの成分を混ぜて有機質のぼかしをつくり、それを利用しながら栽培を行っているという。

写真 10 レタス・菜の花を有機農法で生産する伊藤博之氏



#### 有機野菜栽培の問題点

瀬川地区に限らず、東日本大震災の被災地は現在も風評被害の影響がある。「福島県産」というだけで消費者やスーパーから敬遠されてしまう。

また伊藤氏の野菜の特色である「有機栽培」という付加価値が農協を間に挟むと消えてしまう。「福島県産の〇〇」となってしまう。手間、コストをかけて育てた野菜が他の野菜と同じように売られてしまう。

#### 3.3.5. 地域の特産品④—肉牛

瀬川地区の酪農家数は 8 軒(内訳：門鹿 2 軒、新館 4 軒、石沢 2 軒)である。このうちの 1 軒、福島県田村市船引町新館字曲山地内に位置する大森牧場の放牧地を現地調査で訪ねて、酪農家の面川肇氏にお話を伺った(写真 11)。もともとは桑畑であったが 1995(平成 7)年から牧場の話をまとめはじめ、集落の理解により 1996(平成 8)年から蹄耕法で草地化し、放牧を行っている。

大森牧場の放牧地の面積は 10 町歩あるが、現在 1 人でこの大森牧場を運営している。内柵はソーラー電池を使用し、家畜の管理にはセルフロックスタンションを設置し、省力化を図っている。黒毛和種という肉牛を放牧しており、現在合計 35 頭前後の牛を育てている。10 か月ほど育てた後市場に出荷する。

「こどもの国ムシムシランド」、「合戦場のしだれ桜」、「杉沢の大杉」、「あぶくま洞」など、近隣の観光を兼ねて牧場見学に来る人もいる。また夏にはホテルがたくさんいるため、夜に牧場見学に来る人も多い。

また、瀬川小学校の児童の牧場見学を受け入れ、積極的に小学生への食育にも協力している。また放牧技術のアドバイスをを行い、放牧への普及活動に取り組んでいる。

写真 11 大森牧場の放牧地で説明する面川肇氏



#### 大森牧場の問題点

今後は放牧地の拡大を考えているが、土地の所有者が瀬川地区を離れてしまったりして連絡が取れないなど、さまざまな理由から個人の耕作地の使用許可をとることが難しい。

#### 3.3.6. 地域の特産品⑤—蜂蜜

##### ●日本ミツバチの養蜂家

趣味で日本ミツバチを飼育して10年になる養蜂家 佐藤功一氏を、蜂箱が設置されている梅畑にヒアリング調査で訪ねた(写真 12)。以前には親戚から蜂蜜をもらっていたが、飼育に使う蜂箱を渡されたことから自分で蜜蜂を飼うことになった。天然のミツバチが住み着くまで2年かかった。

写真 12 梅畑で日本ミツバチを飼う佐藤功一氏



蜂箱の中には1箱の中に3~5万匹ミツバチがいるが、女王蜂が1匹いてほとんどがメス、オスは20~30匹ほどだそう。蜂箱は重箱のようになっており、一段で約3Lの蜂蜜が採れるという。分家の際は1万匹ほど引き連れて出ていく。分家のタイミングで他のところに逃げてしまわないように、いったん蜂箱の外に出て近く of 場所に止まるので、そこをビニールで捕まえて新しい蜂箱に入れる。このようにして蜂箱を増やしていくそう。ミツバチの天敵はオニヤンマ、スズメバチ。

日本ミツバチは西洋バチに比べて寒さに強いが、西洋バチに比べて花粉を集める量が少なく、また2か月ほどしか生きられない。日本ミツバチより西洋バチの方が、収穫量が多いため、現在、日本ミツバチを使った蜂蜜の販売は稀で、西洋ミツバチがほとんどである。

春になると、ミツバチがこの地域の花の蜜をせっせと蜂箱に運ぶ風景は、それ自体、地域の資源であると感じた。

### 3.3.7. 直売所・アンテナショップ

#### ●田村市農産物直売所 JA 福島さくら「ふぁせる たむら」

田村市の野菜直売所としては、田村市船引町船引字遠表 143 に位置する JA 福島さくらが運営している「ふぁせるたむら」がある<sup>13</sup>。営業時間は9:30~18:30、定休日は毎月第1水曜日(年末年始は休業)で、駐車場は120台分ある。店長の渡辺忠好氏にお話を伺った。

2005(平成17)年に元々タバコ畑だった土地を改修してできた。「ふぁせるたむら」では地元田村市の農家で採れた野菜を販売しており、登録をした農家が直接運んだものをそのまま出荷している。

登録会員については、田村市、三春町、小野町が地区本部の管轄ということになっており、現在の会員は約530名である。しかし、年間1点も出荷をしない農家が約100名、年に1回ほど出荷する農家が約250名もいる。毎日持ってくる農家は冬場で120名、夏場で180名程に留まっている。瀬川地区の会員登録者数は18名で、根菜や葉物を中心に出荷している。

「ふぁせるたむら」では、農家の方が朝出荷した新鮮な野菜以外にも商品がある。まず「惣菜工房」には日替わりの手作りのお惣菜が販売されている。「豆腐工房」では地元産大豆を100%使用した豆腐が販売されている。「ピザ工房」ではその場で専用石窯オーブンで焼いた出来立てのピザがいただける。「ジェラート工房」では定番の味から、ピーマン、カボチャなど福島のおいしい野菜を利用した珍しい味のジェラートが楽しめる。「ふぁせるたむら」の店内にはイートインスペースがあり、そこで買ったピザやジェラートを食べることもできる。

<sup>13</sup> 以下のホームページ、パンフレットを参照。

JA グループホームページ「JA 福島さくら ふぁせる たむら」  
<https://life.ja-group.jp/farm/market/detail/?id=975&state=fukushima>  
JA 福島さくらホームページ「農産物直売所」  
<http://ja-fsakura.or.jp/service/tyokubai.html>  
野菜直売所ふぁせるたむらパンフレット

写真 13 田村市農産物直売所「ふあせる たむら」



他にも、加工品コーナーでは地酒やジュースが置いてあり、新館で製造されたエゴマ油(110g)も販売されている(写真 14)。また、精肉コーナー、生花コーナー、手芸品コーナーに地元産の商品が売られている。

写真 14 販売されているエゴマ油



「ふあせるたむら」では、客を集めるために月に1~2回の頻度でイベントを行っている。「りんご祭り」や「そば祭り」、「みかん祭り」のようにその時々旬の農作物のイベントや、ポイント2倍、割引などの小イベントも行っている。

#### 「ふあせるたむら」の問題点

2011年の震災以降、若い客や子連れの客層が減ったがジェラート工房やピザ工房で少しずつ取り戻している。しかし、いまだに県外の客の中には福島県産というだけで買うのをやめる人もおり、少なからず原発事故の風評被害の影響が残っているとおっしゃっていた。

また、登録農家としては、昨年あたりから地元に戻ってきた20代、30代の若い新規会員が見受けられるものの、まだ数が少ない状況(近年の新規会員 2016年が3名、2017年が2名

である)。

### ●ふねひきアンテナショップ

JR 船引駅近くにある「ふねひきアンテナショップ」では、田村市船引町の観光 PR として観光パンフレットの配布や観光写真の展示、特産品の PR と販売を行っている<sup>14</sup>。営業時間は 10:00～18:00 で、毎週月曜が定休日となっている。喫茶コーナーもあり、待ち合わせ場所としても利用できる。また、特産品の発送や、定期的に「芸術・文化団体ギャラリー展」を開催している。

瀬川地区の特産品であるエゴマ油の販売・PR も行っている。焙煎・生絞り両方とも 120cc で 1200 円、300cc で 2800 円で販売している。また、店内にはエゴマ油やエゴマのおいしい食べ方のチラシも置いてある。他のエゴマ商品では、「やまと豚エゴマみそ漬」、「田村エゴマこんにゃく」、「エゴマうどん」などが販売されている。お菓子類では「えごまで元気」というエゴマ入りのサブレパイや、エゴマ入りのかりんとう饅頭、「えごまの里」といったらくがんもここで購入できる。かりんとう饅頭は田村市が発祥の地だそうだが<sup>15</sup>、現在では全国で定着してしまっているのであまりこのことは知られていない。

ほかにも滝根町の「あぶくま天然水・サイダー」、「練りじゅうねん」や常葉町の「しそジュース」、大越町の「鬼みそ」、都路町のハム工房関連製品、竹下夢ニデザイン小物など、地元ならではの商品が並んでいる。

写真 15 ふねひきアンテナショップで商品をチェックするメンバー



<sup>14</sup> 福島県庁ホームページ「田村市ふねひきアンテナショップ」(以下の URL 参照)

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/32031c/megumimise-tamuraantennashop.html>

「ふねひきアンテナショップ」(以下の URL 参照)

<http://www.shokokai.or.jp/07/0752710024/index.htm>

<sup>15</sup> 発祥には諸説あるが「かりんとう饅頭」の名が最初に付いたのは田村市の和菓子店「あくつ屋」と言われている。

### アンテナショップの問題点

「ふねひきアンテナショップ」のホームページには田村市船引町の PR と書かれていて、確かにエゴマの調理法のチラシや、特産品の PR を行っているが、その情報が店内にとどまってしまう。もうひとつは、特産物を全体的に PR したいのかもしれないが、実際に店頭へ足を運んだところ、どの商品の何を PR したいのかがあまり伝わってこなくて少しインパクトに欠ける部分があった。

### 3.3.8. 商店・飲食店・温泉

現在、瀬川地区には、小売店・商店は 14 店舗(内訳：門鹿 5 店、大倉 5 店、新館 3 店、石沢 1 店)存在するが、インターネット上に店舗の情報はほとんど掲載されていない。瀬川地区に元々あった商店の多くは店をたたんでしまっているため、買い物をできる場所が少ない。地元の人だけでなく、外部から収入を得ることが難しい。また、瀬川地区には門鹿にコンビニエンスストアが 2 軒ある。

現地調査で訪れた門鹿にある「田端屋商店」では、後継ぎがないため現在の店主が引退したら店を閉める予定だという。古いタイプの田端屋商店の向かいには、セブンイレブンがあり、これから田端屋商店が売り上げを伸ばすのは非常に厳しくなっている。

また、個人経営の商店のすぐ向かい側にコンビニエンスストアがあるなど地区内で商店が分散されていない場所や、4 つの行政区分の中で石沢が最も人口が多いのにもかかわらず商店が 1 店しかないの、自動車を運転しなくなった高齢者などにとっては不便であろうと思われた。

飲食店では新館に「せがわ食堂」というラーメンを中心とした定食屋がある<sup>16</sup>。地元では有名で、土日には船引や郡山からもお客が来るとのことである。また、聖石温泉のような休憩できる場所があるものの人の気配が感じられず、それぞれの存在に気が付いてもらうことが難しい。もう少しお客さんと呼び込むための工夫が必要と思われた。

#### ● 聖石温泉

[所在地]福島県田村市船引町大倉字聖石 215

[アクセス]国道 349 号線を船引町内から小野方面へ車で 10 分。

[営業時間]8:00～19:00

[定休日]月曜日

大倉の国道沿いに位置する聖石温泉「恵の湯」は食堂「山の幸」と呼ばれるお食事処も併設された個人経営の温泉である。ここの源泉は引き湯ではなく敷地内から湧き出したもの。温泉は鉄系の冷鉱泉のため沸かし湯で循環もしている。湧出時は透明だが循環しているために茶濁り系になっていると言われている。ボーリングする資金がなかったため、シャベルで掘

<sup>16</sup> 食べログ「せがわ食堂」(以下の URL)を参照  
<https://tabelog.com/fukushima/A0702/A070203/7010332/>

ったら本当に湧き出てきたと言われている<sup>17</sup>。

### 3.4. 遺跡及び文化財等

瀬川地区には遺跡だけで 25 カ所あり、文化財としては福島県緑の文化財「熊野・鹿島神社のスギ」、そして田村市指定の文化財としては 8 件ある<sup>18</sup>。図表 19～22 は、集落支援員が 2016(平成 28)年度に調査を行って、瀬川地区の遺跡や伝説、神社仏閣などの写真、地図などをまとめている資料「遺跡や伝説など—過去からの送りもの—瀬川地区」から作成したものである<sup>19</sup>。熊野・鹿島神社のスギは樹齢約 400 年以上とされる熊野スギ・鹿島スギであり、1998(平成 10)年 5 月 18 日に県緑の文化財に指定された<sup>20</sup>。また伝統文化として、各地区の神社の例大祭、石沢の悪魔払い、各地区(門鹿地区を除く)の夏祭りがある。

地域資源としては瀬川地区にはかなりたくさん遺跡、伝説、神社仏閣などが存在していると言ってよいだろう。その歴史的な意義を一般の方々に向けて発信していくことで、観光資源として売っていけないだろうか。

図表 19 遺跡・塚等・館跡

	遺跡	塚等	館跡
門鹿	門鹿高森遺跡	蛇森塚 門鹿塚跡 樋ノ口供養塔 小砂田供養塔	向館跡
大倉	向台遺跡		大倉館跡 丈福山館跡 赤沼館跡
新館	日渡山遺跡 新館下遺跡 曲山 A 遺跡 曲山 B 遺跡 曲山 C 遺跡	日渡山塚群 曲山塚群 新館下塚群 新館六角堂跡	曲山館跡 新館館跡 大森館跡 丈福山館跡
石沢	宮ノ脇遺跡 成沢遺跡		石沢館跡

[出典]逸見監修・集落支援員編集(2016)、4～18 ページより作成。

<sup>17</sup> Takema のあっちこっち MENU! 「田村市の秘湯『聖石温泉 恵の湯』に福島の明日を感じる」(以下の URL)の旅行記の中で、聖石温泉について詳細に紹介されている。

[http://achikochi.takema.net/kokunai5/2011\\_GW/2011gw\\_03.html](http://achikochi.takema.net/kokunai5/2011_GW/2011gw_03.html)

<sup>18</sup> 田村市ホームページ「市の文化財一覧」(以下の URL)を参照。

<http://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/30/bunkazai.html>

<sup>19</sup> 逸見克己監修・集落支援員編集「遺跡や伝説など—過去からの送りもの—瀬川地区」(平成 28 年度集落支援事業)瀬川地区区長会、2016 年。

<sup>20</sup> 由来は逸見監修・集落支援員編集(2016)、30 ページを参照。

図表 20 昔話・伝説等

	昔話	伝説等
門鹿	向館	蛇森塚 大峯山・行屋森
大倉	大倉館	首洗池 水晶の碁盤
新館	新館館 曲山館 赤沼館	赤沼 嗽(うがい)の清水 蚕卵種石(こたねいし) 新館の七不思議
石沢	石沢館	行屋の井戸 蓬田杉と蛇骨 市神

[出典]逸見監修・集落支援員編集(2016)、19～29 ページより作成。

図表 21 田村市指定の文化財

2005(平成 17)年 4 月 18 日制

門鹿	樋ノ口供養塔	有形
	小砂田供養塔	有形
	門鹿王子神社の算額	有形
大倉	大倉の太々神楽	無形
新館	絵馬「馬籍の図」(2 面)	有形
	日渡神社の算額	有形
	新館八幡神社の算額	有形
石沢	石沢の三匹獅子舞	無形

[出典]逸見監修・集落支援員編集(2016)、31～33 ページ参照。

図表 22 神社・仏閣等

門鹿	王子神社 聖徳神社 稲荷神社 薬師堂 愛宕神社	古室神社 妙見神社 秋葉神社 地藏様 薬師様(幕ノ内)
大倉	大倉神社 八坂神社(北ノ内) お地藏様(北ノ内) 薬師堂(鑄田) 能泉寺	八坂神社(日向) 祖与内神社 虚空蔵尊 大倉お堂
新館	日渡神社 八幡神社 秋葉神社 竜泉寺	新館神社 熊野神社 十王地神社 点灯記念碑
石沢	熊野・鹿島神社 熊野神社(浜井場)	山津見神社 熊野神社(上青石沢)

	古峯神社	羽山神社
	薬師堂	子守地蔵
	長久寺	宝蔵寺

[出典]逸見監修・集落支援員編集(2016)、35～41 ページより作成。

写真 16 新館の竜泉寺にて集落支援員の説明を受けるメンバー(左)と竜泉寺からの眺望(右)



以下では、よく知られている文化財等のみを取り上げて、瀬川地区の観光資源としての資産について見ていく。

### 3.4.1 無形民俗文化財

#### ●石沢の三匹獅子舞

[開催地]田村市船引町石沢字東宮久保 109 石沢鹿島・熊野神社

[開催日]毎年 11 月 3 日

[継承団体名]石沢三匹獅子舞保存会

[アクセス]磐越道船引三春 IC から車で 20 分

写真 17 石沢の三匹獅子舞



[出典]田村市ホームページ「田村市指定無形民俗文化財」(以下の UPL)より引用。  
<http://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/30/minzoku-geino.html>

石沢鹿島・熊野神社の秋季例大祭で奉納される舞であり、田村市指定無形民俗文化財に指定。「通りの舞」、「宿入れの舞」、「そぞろきの舞」、「花粋の舞」、「歌の切りの舞」、「しまいの舞」の6種目が行われている。所要時間としては30分に及ぶ。現地調査で伺ったところ、県外からの来場者も多いということである。

瀬川小学校の校長先生による解説文が瀬川小学校のホームページに掲載されているので、それを以下に引用させていただく。

…(前略)その石沢地区には、熊野神社と鹿島神社が一つの社にまつられています。(中略)熊野神社と鹿島神社の由来については、鳥居手前の説明板に書いてありました。

これによると、熊野神社がこの地にまつられるようになったのは、延暦年間(782～805)の説と元永年間(1118～1120)の説があるようです。二つの説には、時間的に随分開きがありますが、いずれにせよ大きい区分でいうと、奈良時代末から平安時代ということになります。鹿島神社は、大同2年(807)に石沢字宮ノ脇地内にまつられていたものを明治の神合祀の布達によりこの地に遷し、熊野神社と鹿島神社として並祀されるようになったということです。熊野神社は、石沢村小田の住人本田太郎左衛門が紀伊国(現・和歌山県)より、鹿島神社は石沢村住人本田孫市が常陸国(現・茨城県)より、それぞれ石沢の地に祀ったものということです。また、参道には、二本の大杉をみることができます。これは、慶長元年(1596)年に植樹されたものといわれ、福島県緑の文化財に登録されているということです。

尚、石沢地区には「三匹獅子舞」が受け継がれており、熊野・鹿島神社の秋季例大祭で奉納されます。三匹獅子舞がいつ頃伝わったかははっきりとはしませんが、江戸時代後期に杉沢(現・二本松市岩代町杉沢)から習い請けたといわれています。瀬川小学校の子どもたちも、地区の方々(師匠とよばれるの方々)から獅子舞を習い、この神社の境内で舞を奉納します。この「三匹獅子舞」は、平成17年4月18日に田村市指定無形民俗文化財になっています。子どもたちの獅子舞の様子は、秋に本ホームページで紹介したいと思います。

[出典]校長の自由研究⑧(石沢の神社、三匹獅子舞)(以下のURL)を参照  
<http://www.tamura.gr.fks.ed.jp/index.php?key=joow3bbei-1654>

## ●大倉の太々神楽

[開催地]田村市船引町大倉字上台 大倉神社

[開催日]毎年11月第1土曜日

[継承団体名]大倉太々神楽保存会

[アクセス]磐越道船引三春ICから車で15分

大倉神社秋季例大祭で奉納される神楽で、田村市指定無形民俗文化財に指定。素面で舞う小神楽、面を用いて舞う大神楽の合わせて36座が伝えられている。明治初期、田村地方で神楽の師匠として活躍した國分大隅(大倉神社神)から習い受けた大隅流神楽。

写真 18 大倉の太々神楽



[出典]田村市ホームページ「田村市指定無形民俗文化財」(以下の UPL)より引用。  
<http://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/30/minzoku-geino.html>

瀬川小学校の校長先生による解説文が瀬川小学校のホームページに掲載されているので、それを以下に引用させていただく。

倉神社秋季例大祭では、神社境内にある神楽殿で神楽舞が奉納されます。大倉の太々神楽は、平成 17 年 4 月 18 日に「田村市指定無形民俗文化財」に指定されています。以下、田村市教育委員会により掲げられた説明書きより引用します。

田村市指定無形民俗文化財

大倉の太々神楽

由来等

大倉の太々神楽は大倉神社秋季例大祭に境内の神楽殿で奉納されています。江戸時代後期、神楽の師匠として活躍した國分大隅（神社の西側に顕彰碑が建っています）が大倉神社の神職に就いていたことが縁で、村人たちに神楽を教えたのがその始まりとします。演目は「小神楽」・「大神楽」の合わせて三十六座を伝えますが、県内でもこれほどの演目数を伝えるところはそうはなく、また出雲流神楽の古風な姿を良く継承していることから、その価値は高い物といえます。保存会が熱心に後継者育成に取り組み郷土の貴重な芸能を守っています。（田村市教育委員会）

瀬川小の子どもたちもこの神楽を地域の方よりご指導いただき、舞っています。そして、9月6日(日)12:00 開場、13:00 開会で須賀川市文化センター大ホールで行われる「第 54 回 福島県芸術祭開幕行事」において、神楽舞を披露いたします。是非、足をお運びいただきご覧ください。

[出典]校長の自由研究⑤（大倉の太々神楽）

<http://www.tamura.gr.fks.ed.jp/index.php?key=joqdyuago-1654>

ここで紹介した「石沢の三匹獅子舞」「大倉の太々神楽」以外に、田村市指定を受けていないが、「門鹿の太々神楽」は春・秋の例大祭に、「新館の太々神楽」は秋の例大祭に奉納され、継承されている。

### 3.4.2 有形民俗文化財

#### ●日渡神社の絵馬「馬籍の図」

[所在地]田村市船引町新館下 896

田村市船引町新館字下地内に所在する日渡神社は、もとは満願寺の観音堂で、1054(天喜2)年、暗夜に光明を放つ奇石が飛降したところに堂宇を建て、日渡観音と称したと言われている。江戸時代には仙道三十三観音、田村円通三十三観音、田村姓氏三十三観音、三春領百観音それぞれの霊場地のひとつとなっていた。

写真 19 日渡神社の絵馬「馬籍の図」



[出典]田村市指定有形民俗文化財 絵馬「馬籍の図」(2面)(以下の URL 参照)より引用。  
<http://www.city.tamura.lg.jp/uploaded/attachment/14530.pdf>

また、馬の神様として篤く信奉され、社殿には数多くの絵馬が奉納されている。中でも「馬籍の図」は三春領西北部の26村880余頭の飼育馬が描かれ、村名や飼主名も記されており、当時この地方で馬産が盛んに行われていたことがわかる。これほど多くの馬が描かれている絵馬は県内でも珍しく貴重なもの。絵師の雲竜斎移岳は地元の絵師と思われるが詳しいことは不明。

なお、日渡神社には、江戸時代、額や絵馬に和算の問題や解法を記して奉納された算額もあるとのことだが、田村市のホームページに詳細は記されていない。

### 3.4.3 有形文化財

#### ●樋ノ口<sup>くいのくち</sup>供養塔

[所在地]田村市船引町門鹿字樋ノ口地内

田村市指定有形文化財である樋ノ口供養塔は門鹿に存在する。1292年12月の紀年名が確認できるもので市内の石造物の中で最古であり高さ130cm幅111cm。娘を亡くした親が建立したものとされている。

写真 20 樋ノ口供養塔



[出典]田村市指定有形文化財「樋ノ口供養塔」(以下の URL 参照)  
<http://www.city.tamura.lg.jp/uploaded/attachment/14527.pdf>

### 3.4.4 その他

#### ●蛇盛塚のしだれ桜

[所在地]福島県田村市船引町門鹿幕ノ内 78-1

門鹿に位置する地域に災いをなす大蛇を退治し、その亡骸を供養したという言い伝えのある塚<sup>21</sup>に咲くしだれ桜。推定樹齢 120 年と言われている。「蛇盛塚のしだれ桜」の隣にある石碑「蛇盛塚としだれ桜の由来」を、瀬川小学校の校長先生による解説文が瀬川小学校のホームページに掲載されているので、それを以下に引用させていただきます。

「蛇盛塚としだれ桜の由来」と題された石碑には、次のように記されています。

『言伝えによると西暦 830 年頃（天長年間）鹿又字館地内を曲流する流水を稲田に導くための工事を行った。それは、至難の工事である為、村を挙げてその役に従事し漸く工事の完成を見る頃 この地に巣くっていた大蛇を発見 数十人でこれを退治したといわれ、この大蛇の胴体からの血潮が川水に混じると紫色の川となり七昼夜にわたりこの川下を紫色に染めて流れ、人々はこの川を紫川と呼んだという。この大蛇の頭は、川を流れに流れ、この川下一里余門鹿の樋の口に流れ着き門鹿住民がこれを拾い上げ、幕の内地内に葬った（中略）

それがこの蛇盛塚（通称 蛇盛稲場）である。（中略）また、桜は、西暦 1870 頃（明治初期）飛田家の祖先が三春滝桜の地より求めこの蛇盛塚に植樹した（後略）』

この説明をまとめると…

・平安時代の初期に、鹿又字館地内（現 美山小学校学区）において、川より稲田に水を引く大工事を行った際に大蛇が現れ、数十人の村人によって頭を切られ退治された。

・大蛇の胴体から出る血潮により 7 昼夜にわたり川が紫色に染まった。以来、この川は、「紫川」と呼ばれるようになった。

・大蛇の頭は、川下の門鹿地区（現 瀬川小学校学区）の樋の口（といのくち）まで

<sup>21</sup> 逸見監修・集落支援員編集(2016)の 23 ページに、「蛇塚森」として紹介されている。

流れ着きそこで住民によって葬られた。これが「蛇盛塚」である。

・桜は、明治時代に入ってから、飛田氏が三春町より苗を求め、この塚に植樹した。

[出典]校長の自由研究⑥（門鹿の蛇盛塚と紫川）より引用(以下の URL 参照)。  
<http://www.tamura.gr.fks.ed.jp/index.php?key=jou28htw0-1654>

### 3.5. 耕作放棄地と空き家

#### ●耕作放棄地の現状

写真 21 中山間地の耕作放棄地



福島県田村市は、2011年に発生した東日本大震災に伴う原発事故等の影響により人口の減少が続き、少子高齢化も進んでいる。中でも、田村市を支えてきた農業をはじめとした第一次産業従事者の減少が著しく、従事者の高齢化、後継者不足が深刻化し、耕作放棄地も増加している。耕作放棄地の実際の面積はデータが存在しないが、現地調査では、瀬川地区でも手入れされないまま放置された田畑がたくさん見られた。とくに山の斜面にある田畑や山間にある田んぼなど不便な場所ほど放棄地が増える傾向がある。また、これらの耕作放棄地では、震災後にイノシシやイノブタが激増し、人が住まなくなったことに伴って害獣被害も深刻な問題となっている。

#### ●空き家の現状

市が把握している空き家の総数は35軒あり、石沢に9軒、新館に9軒、大倉に11軒、門鹿に6軒あることが確認されている(図表23)。データ上ではこのような戸数になっているが、実際は所有者が存在するものの連絡が取れなくなっていたり、数年にわたって固定資産税などを納税しない所有者が存在している物件もあり、空き家は潜在的にも存在している。

図表 23 瀬川地区の空き地調査図



石沢	イエロー	9 軒
新館	グリーン	9 軒
大倉	オレンジ	11 軒
門鹿	ピンク	6 軒

[出典]瀬川住民センターにて撮影

### ● 空き家・耕作放棄地問題への対策

#### 田村市「空き家・空き地情報バンク」

これらの問題を解決するために、田村市では「空き家・空き地情報バンク」を創設して、定住促進、農山村地域における日常生活機能維持、及びネットワーク構築に取り組んでいる。「空き家・空き地情報バンク」での情報登録は、田村市ホームページ、協働まちづくり課をはじめ、各行政局市民課窓口で行われており、無料で登録することができる。

空き家・空き地の利用申し込みがあった場合は、市が情報登録者(空き家・空き地を登録した人)と指定宅建業者に連絡し、その後の交渉は指定宅建業者によって進められる。ここでは農地の取引でなく、あくまでも宅地の取引となるため、面積が 500m<sup>2</sup>以上の農地は宅地への転用が認められない可能性があり、その際は「空き家・空き地情報バンク」には登録できない。また、物件の登録期間は最長 2 年間であり、その後継続を希望する場合は更新手続きによってさらに 2 年間登録することができる。

#### 福島県「空き家・ふるさと復興支援事業」

福島県は「福島県空き家・ふるさと復興支援事業」(福島県の移住等支援制度)として、東日本大震災・原子力災害で被災(半壊以上)・避難されている方、もしくは県外から福島県内に移住される方が、定住するための空き家を購入または賃借する際に、空き家をリフォームする場合に、県からの空き家リフォーム等の費用を被災者・避難者・移住者には最大 190 万円(リフォーム補助上限 150 万円/戸とハウスクリーニング等補助上限 40 万円/戸)、また 2017 年度より子育てを行う移住者には最大 250 万円(リフォーム補助上限 210 万円/戸とハウスク

リーニング等補助上限 40 万円/戸)を補助する制度を設けている<sup>22</sup>。移住促進事業なので、1年以上定住することを条件としている。

さらに田村市では、福島県からの補助に加えて、以下のような補助を用意している<sup>23</sup>。

#### 田村市「転入者空き家リフォーム補助」

市外から移住される方を対象に、空き家バンク物件のリフォーム費用を補助している。条件に寄り、「福島県空き家・ふるさと復興支援事業」と併せて活用できる。

[内容]住宅改修費用の 20%を補助(上限 60 万円)

[対象者]「田村市空き家・空き地情報バンク」に登録された物件を改修し、市外から転入して 5 年以上田村市に居住することを誓約できる方。賃貸、購入いずれも対象。

#### 田村市「転入子育て世代空き家改修補助事業」

市外から転入する子育て世代が空き家バンク物件をリフォームし居住する際に、空き家リフォーム補助に加え、子供 1 人につき 10 万円を追加支給する。

[内容]住宅改修費用が 150 万円以上の場合、子供(15 歳以下)の人数×10 万円を補助

[対象者]市内に住民票を異動し、5 年以上田村市に居住することを誓約できる方で、0 歳から 15 歳までの子供を扶養し同居している方。ただし、転勤や学業など一時的な転入者は対象外。

#### 田村市「チャレンジハウス」

「空き家・空き地情報バンク」に加え、田村市では「チャレンジハウス」というシェアハウスの提供も行っている。これは、就農や移住を検討しているが、不安を感じている移住希望者を対象に、一定期間滞在し、田村市での暮らしを体験できるサービスである。家賃は無料であり、公共料金相当額の 300 円/人・日で利用することができる。就農や移住に向けての仕事探しや住居探しの拠点としても幅広く用いられている。ただし、瀬川地区にはチャレンジハウスは存在しない。

#### 耕作放棄地を利用したそばやアピオスの作付

現在、「やってみっ会」が耕作放棄地を利用したそばやアピオスの栽培を試みている。今後は作付面積を増加させていくことを予定していると聞いた。

---

<sup>22</sup> 福島県ホームページ「福島県空き家・ふるさと復興支援事業」(以下の URL)を参照。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/41065b/akiyafurusato.html>

<sup>23</sup> 転入者空き家リフォーム補助と転入子育て世代空き家改修補助事業については、田村市ホームページ「移住等支援制度」(以下の URL)を参照。

<http://www.city.tamura.lg.jp/uploaded/attachment/13634.pdf>

### 3.6. 地域活性化支援団体

#### 瀬川地区支援活動の現状

現在、瀬川地区への支援活動は主に田村市とボランティアが行っている。集落支援員と瀬川地区の住民が主体となって組織された「支え合う地域づくり瀬川チーム」、「やってみっ会」、「瀬川地域づくり協議会」の3つのボランティア団体が、少子高齢化対策、文化や自然の維持保全等、さまざまな視点から地域を見つめ、同時に活性化を図る活動を行っている。その他、瀬川地区区長会を含む既存の団体が地区組織(地域カルテ)として存在すると聞いたが、詳細はわからなかったため、ここでは割愛する。瀬川買い物便利手帳、地区全体の健康体操(瀬川住民センターにて月に何度か開催される)もボランティア団体の行っている活動である。

#### ●支え合う地域づくりチーム瀬川

「支え合う地域づくりチーム瀬川」はKH氏が結成した瀬川地区の少子高齢化対策のために活動を行っている団体である。活動としては交流会を現在までに2回実施しており、道路脇に花を植えてフラワーロードを作る活動も行っている。今後も交流会を実施し、少子高齢化対策の話し合いの場も設けようとしている。

#### ●やってみっ会

「やってみっ会」は新田昭悟氏が結成した団体。「小さな体験活動を通し、瀬川地区の維持及び活性化に資する」という理念のもと、耕作放棄地を利用したそばの作付などの活動を行っている。

写真 22 瀬川フェスティバル 2017 でのそば打ちの実演



活動内容としては、手打ちそばときわ会と連携し、そば打ち教室を開催している<sup>24</sup>。瀬川小学校裏の休耕地を利用し、今年からそば栽培を開始した。そばの作付・収穫は1町歩を予

<sup>24</sup> 「やってみっ会」がそば栽培を開始したため、隣の常葉町にある手打ちそばときわ会よりそばの販売についてなど協力を得ている。

定している。「瀬川のたのたウォーキング」を開催したり<sup>25</sup>、瀬川フェスティバルに参加協力してそば打ちの実演とそばの提供を行っている(写真 22)。今後はアピオスの作付及び利用の検討、チーム瀬川主催交流会への協力、軽トラ直売所(軽トラ販売)の組織づくりに向けた話し合い継続、30 年春にウォーキング開催、「支え合う地域づくりチーム瀬川」などの他の組織との連携協力を深め、更なる地域の活性化に取り組むことを計画している。桜の木を瀬川地区内にある牧場に植樹する計画も進行中である。

#### ●瀬川地域づくり協議会

「瀬川地域づくり協議会」は本田実氏を代表者としている団体。市職員として、居住地区の活性化のための具体的活動を行うことを考えている。この団体は 2017 年 8 月に結成されたばかりで現在具体的取組の話し合いを進めている。

#### ●地域づくり推進員(専任集落支援員)

瀬川出張所には田村市地域づくり推進員(専任集落支援員)として、今回の現地調査に同行していただき、瀬川地区の現状について説明して下さった佐々木正和氏がいる。集落支援員の活動としては地域カルテの作成及び更新、1 人世帯の実態調査、空き家の再調査、耕放棄地の再調査、休耕地活用、小規模直売所の話し合い、「せがわだより」の発行、住民センターの利用促進、各種イベントの計画実施、農産物の生産及び消費の仕組みづくり、子育て支援、高齢者支え合いの検討を行っている。瀬川地区の活性化の全般をマネジメントする任務を負っていると行ってよいだろう。

#### ●田村市役所総務部協働まちづくり課

田村市総務部協働まちづくり課は、地域づくり推進員(専任集落支援員)と協力しながら、以下のような業務を行っている。

##### (1)地域カルテの作成

地域カルテとは瀬川地区の人口や問題点、現状を詳細にまとめた資料

##### (2)休耕地活用、小規模直売所の話し合い

##### (3)「せがわだより」の発行

瀬川地区でのイベントについて掲載し不定期に発行。

##### (4)各種イベントの計画実施

瀬川住民センターで高齢者向けのレクリエーションなどを開催。

##### (5)農産物の生産及び消費の仕組みづくり

---

<sup>25</sup> 2017 年 10 月 14 日(土)に「やってみっ会」及び瀬川地区区長が主催した「第 1 回瀬川のたのたウォーキング」を開催。あいにくの小雨の中を 98 名の方が参加して行われた。3km と 5km の 2 つのコースを用意して実施した。「せがわだより」第 15 号、2017 年 11 月 1 日参照。

## (6)田村市への移住・定住交流促進事業<sup>26</sup>

### ●田村地域デザインセンター

田村市には、まちづくりを研究し実践する地域密着型のシンクタンク「田村地域デザインセンター」がある。この施設は、2008(平成20)年8月に田村市、住民団体、東京大学が共同で設立したものであり、公・民・学が連携して地域の未来を切り開き、諸課題に取り組む新しい公共体として期待されている。

## 4. 瀬川地区の抱える問題と課題

### 4.1. 現地調査から得られた問題点

現地調査を通して、メンバーで出し合った意見を集約すると、瀬川地区は以下のような問題点を抱えていると考えられる。

(1)地域コミュニティが崩壊しつつある。地域住民の交流の場がない。

- ・日常生活に対するサポートが少ない。主に健康面をサポートする施設がない。
- ・子供や若者が少ない。子供を育てる環境が整備されていない。子育てに対する支援が補助金のみである。
- ・高齢者に対する日常生活においてのサポートが少ない。

(2)瀬川地区に働き口、収入源がない。

- ・収入源、働き口が少ない。

(3)外部の人が瀬川地区を訪れる理由がない。

- ・観光地がない。
- ・観光地へのアクセスが悪い。公共交通機関が不便。
- ・お金を落とす場所がない。訪問の理由がない。魅力がないから人が来ない。
- ・宿泊施設が不足している。

(4)空き家、耕作放棄地が増加している。

- ・空き家が増加している。
- ・農地が活用されていない(耕作放棄地が多い)。

### 4.2. 取り組むべき課題

前項で列挙したように、瀬川地区の抱える問題は「子育てしにくく、日常生活が不便。」「収入源がない。」「外部の人が瀬川地区を訪れる理由がない。」「耕作放棄地、空き家が増えている。」ということに分類される。これらの問題点から、私たちのチームでは瀬川地区で

---

<sup>26</sup> 田村市への移住促進事業については以下の URL を参照。

田村市総務部協働まちづくり課「浪漫地区-Romantic TAMURA-移住・定住交流サイト」  
<http://pr-tamura.jp/>

取り組むべき課題を以下のように抽出した。

(1)地域住民の交流する場を増やし、日常生活に対するサポートをする。

地域コミュニティを再形成して、住民の「やりたい」を支える。

(2)収入を発生させる仕組みをつくる。

雇用を生み出すことで、住み続けたい人・戻ってきたい人・住んでみたい人を増やす。はじめは小さく立ち上げて、徐々に規模を拡大していく。例えば、近くで働ける場所があれば働きたいと思っているお母さん方に雇用を生み出す。

(3)外部から注目してもらい、立ち寄ってもらい、交流人口を増す。

空き家や耕作放棄地を再利用することで、「訪れてよし、住んでよし」の地区にしていくことで、「住み続けたい」、「退職後は戻りたい」、「移り住みたい」と思ってもらえるようにする。

これらの課題に取り組んで、地域コミュニティを活性化させて、住民が地元を誇りを持って住み続けられるように、「瀬川プライド」を醸成することが、達成すべき目標となるを考える。

## 5. 課題解決のための提案

前節では瀬川地区の抱える問題点から、取り組むべき課題を抽出したので、それらの課題を念頭に、ここでは、すぐにでも取り組めるものから、時間とコストが掛かるものまで、8つの提案について説明する。なお、以下の提案企画に出てくる名称はまだ構想段階のものであり、確定したものではない。

### 5.1. 地域住民の交流の場「コミュニティカフェ」を作る

「瀬川フェスティバル 2017」ではお母さん方から「地域で交流する場、休んで話をする場がない」という意見がたくさん聞かれた。あまり予算を掛けなくても、すぐにでも実現可能なものもある。

すぐに始めることができるというだけでなく、いま、地域コミュニティで人々が集まるための場所、“居場所”、“たまり場”としての「コミュニティカフェ」をつくるのが、建築などのハード、コミュニティデザインなどのソフトの両面から注目されている<sup>27</sup>。つまり、地域の人々が集い、日常生活の問題について相談したり、意見交換をしたりする中で、地域の課題を自分たちで明らかにし、行動を起こそうというムーブメントを起こすための場として、まず取り掛かるべきは「コミュニティカフェ」を作ることだと思われる。地域の活性化に向けて、地域コミュニティを機能させるための中心的な役割を担うことが期待できる。

瀬川住民センターを今よりさらに活用し集まる機会を増やすことで、高齢者同士の様子を

<sup>27</sup> 「ご近所未来ラボ by ご近所 SNS マチマチ」ホームページ「各地域の『コミュニティカフェ』から学ぶ、“拠点”を通じて地域住民をつなげる取り組み」を参照。

<http://lab.machimachi.com/entry/cafe>

お互いに確認し合ったり、情報を交換して、日々の生活の楽しみの1つにできるのではないだろうか。今後、高齢者のみの世帯がますます増えていく中で、地域コミュニティとして高齢者をサポートしていく自律的な仕組みが必要となってくると感じた。

図表 24 提案① 地域住民の交流の場「コミュニティカフェ」を作る

企画の概要	瀬川住民センター、旧瀬川中学校、地区の空き家などを活用して、地域の住民がゆつくりと会話を楽しめる場「瀬川のお休み処」(仮称)を作る。
期待される効果	日常生活を地区内で過ごす子育て世代、高齢者の相互交流を増やし、地域住民の憩いの場を作る。
具体的な企画案	次のような機能を備える。コーヒー・紅茶・ケーキなど喫茶店のような場、お茶、漬物、果物、惣菜なども提供する高齢者のお茶のみ場、子供を遊ばせておける場。
参考にした事例	「コミュニティカフェ」 2000年代後半から日本全国に作られており、地域コミュニティの核として運営されている。

その他、関連した提案としては以下のようなものがあつた。基本的には「コミュニティカフェ」と同様に、地域コミュニティを活性化させるための提案であるので、以下にまとめて掲載する。

●子供の預かり場の提供

- ・放課後スクールの実施：放課後に子供を預かってもらえる場を瀬川小学校に提供し、児童の兄弟姉妹であればともに預かってもらえる制度にする。
- ・児童館の設立：瀬川中学校を改築し、児童館にする。

●習い事の場の提供

高齢者の方と子供たちの親交を深める意味合いも含め、高齢者の方が持っている知識を子供たちに伝授する交流会を実施する。

●中学校跡地の有効活用

中学校の跡地は現在そのままの形で残されている。今後何かに活用される見込み等もないため、この跡地を屋内施設として再利用を試みる。地元の方の協力を得てスポーツ大会やスポーツ教室を開く。

## 5.2. SEGAWA マルシェの開催

瀬川地区に外部の人も含めて多くの人を訪れて、お金を落とし経済循環を促すことで瀬川地区の人々の暮らしを豊かにするためにマルシェの開催を提案する。マルシェでは瀬川地区で採れる野菜やコメ・そば・果物など、農産物の販売や、その農産物を活用して瀬川地区の人たちが腕によりをかけた料理を販売する。この他にも、マルシェに多くの人を訪れてもらえるような特色を持った取り組みを行う。

図表 25 提案② SEGAWA マルシェの開催

<p>企画の概要</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「瀬川住民センター」(候補案)で、人々の暮らしを豊かにするためにマルシェを開催する。</li> <li>・地区で収穫された農作物や、それを使った料理を販売。</li> <li>・エゴマやそば等の地域内でとれた農産物の通信販売。</li> <li>・西洋野菜の生産・販売(通信販売)</li> </ul>
<p>期待される効果</p>	<p>地区の住民と外部の人も含めて多くの人が訪れ、そこで交流が生まれ、地元産のものを購入することにより、お金が地区に落ちて、地区の経済循環を促す。</p>
<p>具体的な企画案</p>	<p>[場所]瀬川住民センター          [交通]らくらくタクシー、バス会社と共同でマルシェ便を運航          [客を呼び込む仕組みづくり]フラワーロードやイルミネーションなどを徐々に整備していく。          [イベント]学生による発表会(吹奏楽や書道パフォーマンスなど)お茶会(お茶菓子を食べながら世間話、瀬川の将来について話し合うワークショップ、来訪者に愛を込めて花を植えようプロジェクトなど)</p>
<p>参考にした事例</p>	<p>山形県新庄市の kitokitoMARCHE(キトキトマルシェ) (以下の URL 参照)          新庄市ホームページ「kitokitoMARCHE (キトキトマルシェ)」  <a href="http://www.city.shinjo.yamagata.jp/k001/020/010/030/050/20150511140104.html">http://www.city.shinjo.yamagata.jp/k001/020/010/030/050/20150511140104.html</a>          kitokitoMARCHE 公式サイト  <a href="https://kito-kito.tumblr.com">https://kito-kito.tumblr.com</a></p>

マルシェの開催場所として候補に挙げたのは、瀬川住民センターである。マルシェをするからには多くの人々が訪れてもらわなければ経済効果が期待できない。そこで、注目してもらい、来場してもらうための仕組みを考えた。

また、マルシェまで離れたところに住んでいる住民や外部からの顧客を呼び込むために、田村市を巡回する船引らくらくタクシーやバス会社と共同で「マルシェ便」というマルシェに行く人のための特別な便を出してもらうようにすることで訪れやすくなるだろう。

マルシェで行うイベントも、瀬川地区に賑わいをもたらす魅力を高めていくうえで大変重要な要素である。イベントの一例としては、外部から大学生や高校生を招いて、演奏会や書道パフォーマンスなど、学生や生徒の日頃の活動を発表する場にしてはどうか。また、発表後にはお茶菓子を食べながら自由に交流を楽しんでもらうお茶会を開くのもよいだろう。少子高齢化の進行している瀬川地区において学生と交流する機会は少なく、瀬川地区の住民と生徒や学生にとって貴重な異世代間交流になるのではないだろうか。

そうして、農業と住民の食卓をつなげ、買い物客と高校生・大学生をつなげることで、新しいコミュニティとしてマルシェを作り上げくのが目標である。SEGAWA マルシェの開催

によって、多くの方に瀬川地区を訪れてもらい、お金を落としてもらうとともに、地元住民の方との交流を生み出し、瀬川地区の魅力を堪能してもらって、リピーターとなってもらうことで、瀬川地区に活気と経済循環をもたらすことが期待される。

参考にしたのは、「農、食、生活、買い物、そして日々の生活。人々の「ふれあい」について再考する場」を謳った山形県新庄市の「kitokitoMARCHE(キトキトマルシェ)」である。kitokitoMARCHEの2017年の年間スケジュールとイベントは以下のとおりであった。

- 5/21(日) 10:00-15:00 マルシェ&コーヒー&パンフェス
- 6/18(日) 10:00-15:00 マルシェ&肉フェス
- 7/16(日) 10:00-15:00 マルシェ&クラフト&フリーマーケットフェス
- 8/20(日) 10:00-15:00 マルシェ&カレーフェス
- 9/17(日) 10:00-15:00 マルシェ&環境芸術祭
- 10/15(日) 10:00-15:00 マルシェ&お米とご飯のおとも祭
- 11/19(日) 10:00-15:00 マルシェ&スイーツフェス

写真 23 山形県新庄市の「kitokitoMARCHE(キトキトマルシェ)」



[出典]新庄市ホームページ「kitokitoMARCHE (キトキトマルシェ)」(以下の URL 参照)  
<http://www.city.shinjo.yamagata.jp/k001/020/010/030/050/20150511140104.html>

### 5.3. エコツアーの企画・開催

瀬川地区の魅力を外部の人に伝える方法としては、エコツアーの開催がある。エコツアーは、私たち外部の学生と地元住民と一緒にインベントリー調査を実施することで、地元の住民がそれまで気付かなかった地域の観光資源に目を向けるようになる。その活動を通じて、自律的に住民の方々からエコツアーの企画が次から次に持ち上がってくるようになれば、もう半分は成功したようなものである。それらをエコツアー運営事務局において、調整して商品化できるエコツアーを企画していく。ハイキングコースの設置や、農業体験など、企画できそうなところからはじめることを提案する。エコツアーの開催は、観光マップとも連動することで、瀬川地区を訪ねたいという観光客を増やすことにつながると期待できる。

以下では、農業体験の実施とレンタサイクルの設置について詳しく提案する。

図表 26 提案③ エコツアーの企画・開催

企画の概要	地元の方々に協力していただいて、起伏に富む瀬川地区の魅力を堪能できるエコツアーを住民が主体的に企画し、実施する。
期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・瀬川の魅力を知ってもらい、ツアーに参加してみようと思ってもらおう。</li> <li>・耕作放棄地も活用することもできる。</li> </ul>
具体的な企画案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地形を生かしたハイキングコースを設定（移ヶ岳登山など）</li> <li>・牧場での乳しぼり体験や蜂蜜採集体験など、農業体験を実施（①民宿と提携した農業体験、②収穫から食すまですべて体験できる長期間にわたるツアーの実施、③農業体験インターンシップなど）</li> <li>・課外活動の一環として、ゼミ・学生を誘致する。</li> <li>・レンタサイクルも導入・整備</li> </ul>
参考にした事例	<p>自転車でいこう！にいがたのまち「にいがたレンタルサイクル」ホームページ(以下の URL を参照)</p> <p><a href="http://www.niigata-furumachi.jp/rentc/">http://www.niigata-furumachi.jp/rentc/</a></p>

#### ●農業体験の実施<sup>28</sup>

農業体験の実施を提案するに当たり、以下の3点を提案としてあげる。

- ① 民宿と提携した農業体験
- ② 収穫から食すまですべて体験できるツアーの実施
- ③ 農業体験インターンシップ

①の民宿と提携した農業体験では、主に宿泊者を対象として体験できるようにする。農業体験ができることを1つの特典とし、集客を臨む。農家民宿については、「5.6. 空き家や耕作放棄地の活用」でも取り上げている。

②の農業体験ツアーでは、日ごとまたは月ごとに作成するメニューを決定し、その食材を集めるためにいくつかの農家を巡るという「スタンプラリー形式農業体験」を提案したい。農業体験というと、どうしても1か所に集中しがちであるが、この方法を採用することにより、さまざまな農家を巡ってもらえることができるうえ、参加者自身もより多くの農業体験ができるという利点があげられる。参加者はスタンプカードを持参し、各ポイントとなる農家を訪れ農業体験を実施したのちに野菜を収穫し、すべてのポイントを巡った段階で最終地点へと向かう。そこで他の参加者や地元の方々とともに、自らが収穫した作物を使って、指定されたメニューを作成していくというものである。

<sup>28</sup> 農業体験については、以下のサイトが参考になる。

- ・ 里の物語ホームページ「さあ農業体験をやってみよう！」  
<https://satomono.jp/experience/column/20740/>
- ・ TABICA の農業体験ホームページ(以下の URL)を参照  
<https://tabica.jp/entry/feature/agriculture/>
- ・ 公益社団法人日本農業法人協会「農業インターンシップ」  
<http://hojin.or.jp/standard/internship/>

自らが農業体験を実施し収穫した食物を食べることができる機会を設けることで、農業や瀬川地区という地域をより身近に感じてもらえるきっかけにすることができるのではないかと考える。

③では、農業関係に興味を持った大学生等を募り、短期間民宿に住み込み農業を体験してもらうインターンシップの実施を提案する。実際に地元に住む民宿の方と生活を共にして農業体験を行うことで、地域や農業に対する興味や理解を引き出してもらう意図がある。

### ●レンタサイクルの設置<sup>29</sup>

瀬川地区を観光地化できるように、レンタルサイクルを設けて移ヶ岳までサイクリングで行き、移ヶ岳の四季折々の風景を楽しめるようなハイキングコースを設置するというのはどうだろうか。そのまま牧場へ行ってみたり、養蜂場を訪ねてみたり、空き家をリノベーションしたカフェやレストランをめぐるサイクリングコースを用意する。また聖石温泉で一日の疲れを癒すこともできる。

図表 27 にいがたレンタサイクルマップ



[出典] 「にいがたレンタサイクルマップ」(以下の URL)より引用。

<https://ssl.niigata-furumachi.jp/rentacycle//wp-content/uploads/2015/08/%E3%81%AB%E3%81%84%E3%81%8C%E3%81%9F%E3%83%AC%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%82%AF%E3%83%AB%E3%83%9E%E3%83%83%E3%83%97.pdf>

レンタルサイクルは観光客だけでなく地元の人が買い物などに行く際にも使える。自転車に乗って地域をめぐる、車の移動では気付けないことにも気付けるかもしれない。

参考にしたのは、「にいがたレンタルサイクル」である(図表 27)。ここでは、回収した放置

<sup>29</sup> 「にいがたレンタルサイクル」ホームページ(以下の URL)を参照  
<https://ssl.niigata-furumachi.jp/rentacycle/>

自転車の中から状態の良いものを自転車商業組合が再整備し貸し出しを行っている。レンタルサイクルを最初から新品ではなく再整備されたものを利用することでも良いかと思われる。

#### 5.4. SEGAWA フラワーロードの整備と「愛を込めて花を植えようプロジェクト」

瀬川地区は自然が豊富であるが、荒廃耕作地が多く、十分活用されていない農業用地が多い。そこで、外部の人がその荒廃耕作地を利用してもらい農業用地の活用を促していただけるように行政は取り組んでいく必要がある。

もちろん、行政だけでなく瀬川住民の取り組みも重要になってくる。その取り組みとして、すでに「支え合う地域づくりチーム瀬川」が道路脇に花を植えフラワーロードを作る活動も行っているが、これを拡大して「SEGAWA フラワーロード」を整備する。フラワーロードを整備することで華やかな空間を演出することができ、最近話題になっている Instagram などの SNS に投稿したいと若者が訪れることも期待される。

さらに、お花を植える際にできるだけ多くの地元の人を募集し、瀬川地区の住民が主体的に取り組むことで地元の士気を上げることができると考える。地域住民で士気を上げるだけでなく、このような取り組みが「外部の人たちに自分たちの住む瀬川をどのように見せて、訪れてもらうか」という意識を育み、観光地への小さな一歩に繋がるのではないかと考える。

このフラワーロードの整備と合わせて、外部からの来訪者にも自分の名前が入った木札をつけた花を沿道に植えてもらうことで、瀬川地区に愛着を持ってもらい、フラワーロードの整備に外部の人も協力できる「愛を込めて花を植えようプロジェクト」をやってみてはどうだろうか。「フラワーロード」を足掛かりに、瀬川地区の魅力を高めていくような取り組みが大切になってくる。

図表 28 提案④ SEGAWA フラワーロードの整備と「愛を込めて花を植えようプロジェクト」

企画の概要	現在、一部の瀬川住民の間で少しずつ取り組んでいるフラワーロードを拡大して「SEGAWA フラワーロード」を整備する。
期待される効果	フラワーロードを整備することで華やかな空間を演出することができ、最近話題になっているインスタグラムなどの SNS に投稿したい若者が訪れることも期待される。できるだけ多くの地元の人を募集し、瀬川地区の住民が主体的に取り組むことで地元の士気を上げることができる。
具体的な企画案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・瀬川地区に愛着を持ってもらい、フラワーロードの整備を進める。</li> <li>・また「愛を込めて花を植えようプロジェクト」をやってみてはどうだろうか。このように宣伝していく上で瀬川地区全体の魅力を高めていくような取組も大切になってくる。</li> </ul>
参考にした事例	<p>「にゅうぜんフラワーロード」(以下の URL を参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・富山県入善町「にゅうぜんフラワーロード」 <a href="http://flowerroad.jp/">http://flowerroad.jp/</a></li> <li>・富山県観光公式サイト「とやま観光ナビ」ホームページ「にゅうぜんフラワーロード」</li> </ul>

	<a href="http://www.info-toyama.com/event/50062/">http://www.info-toyama.com/event/50062/</a> ・日本観光振興協会ホームページ「全国観るなび」 <a href="http://www.nihon-kankou.or.jp/toyama/163422/detail/16342ba2212091771">http://www.nihon-kankou.or.jp/toyama/163422/detail/16342ba2212091771</a>
--	---

写真 24 にゅうぜんフラワーロード



[出典]日本観光振興協会ホームページ「全国観るなび」

<http://www.nihon-kankou.or.jp/toyama/163422/detail/16342ba2212091771>

フラワーロードのイメージとして参考にした事例は、富山県魚津市「にゅうぜんフラワーロード」。入善町では町の特産物であり町の花でもあるチューリップを道路沿いの田に集め、自然の中で一面に咲くさまを鑑賞してもらおうと、「にゅうぜんフラワーロード」というイベントを開催。北アルプスを背景に咲き誇る 220 万本以上の色鮮やかなチューリップは、まさに自然のじゅうたん。しかも、球根生産を主体にしているため、会場観覧は無料で行われている。

瀬川地区では、福島県や田村市を代表する花を植えて、地域らしさを演出することもできよう。例えば、福島県の県花「ネモトシャクナゲ」<sup>30</sup>と田村市の花「ツツジ」<sup>31</sup>を植えて「フラワーロード」を整備するというのも考えられよう。樹木(木本)の花を植えるのがよいか、草木(草本)の花を植えるのがよいかは、一概には言えないが、休耕地にそれぞれの所有者が勝手に好きな植物を植えていくというのではなく、どのようにして地域の特長を打ち出して

<sup>30</sup> 福島県ホームページ「福島県のすがた」の「県の花」(以下の URL 参照)

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/ken-no-sugata/hana-tori-ki.html>

<sup>31</sup> 「ツツジ」は、田村市で有名な花であり、毎年5月下旬になると真紅のツツジが咲く。船引町の「堂山つつじ公園」は1ヘクタールほどの敷地にキリシマツツジや山ツツジなど約6000株が植えられている。個人の所有する山の斜面や休耕地を40年以上掛けて整備したという。「県立自然公園高柴山」(884メートル)は3万本のツツジに包まれ、山頂までハイキングコースが設けられていて最盛期には市民をはじめ多くの観光客が訪れる。

・福島民報ホームページ「ふくしま花紀行」「堂山つつじ公園(田村市)」(以下の URL 参照)

[http://www.minpo.jp/pub/topics/hanakikou/2017/05/post\\_478.html](http://www.minpo.jp/pub/topics/hanakikou/2017/05/post_478.html)

・田村市ホームページ「堂山つつじ公園」(以下の URL 参照)

<http://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/18/douyamatumujikouen.html>

・田村市ホームページ「高柴山」(以下の URL 参照)

<http://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/18/oogoe-kankougaido-takasibayama.html>

いくか、どのように他の地域と差別化していくかなど、地域として戦略的に検討していく必要があるだろう。

さらに、ただ来場して花を観るというだけでなく、観たものを実際に購入して帰ることができれば、新しいフラワービジネスとして展開することができるかもしれない。フラワーロードをお花の品評会の会場として展開することもできれば、直接的には無料でフラワーロードを運営することができる。購入方法としては、①フラワーロード自体からお花を摘み取ることのできる“摘み取り方式”、②フラワーロードとは別に同じ花を販売する“販売所形式”の2つが考えられる。

また、ただ花を購入できるだけでなく、(何の花が植えられるかによるが) 購入した花を利用してものづくり体験やお茶を楽しめるができる場を設けても面白いだろう。

### 5.5. 観光マップ・観光案内板の作成

外部の人から注目してもらおう仕組みとして、ここでは観光マップ・観光案内板を提案したい。観光案内板を作る上で、瀬川地区マップを作ることで、瀬川地区のもつ資源を活用した観光スポットを提示し、より多くの観光客に瀬川地区に来てもらえるようにする。

図表 29 提案⑤ 観光マップ・観光案内板の作成

企画の概要	・イラストや写真を記載し視覚的にわかりやすい観光マップを作成したり、観光案内板を設置する。
期待される効果	これまで国道を素通りしていた人や、瀬川地区の地域資源をよく知らなかった人に対して、瀬川の魅力を知ってもらい、立ち寄ってみよう、ツアーに参加してみようと思ってもらおう。
具体的な企画案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラストや写真を記載し視覚的にわかりやすい観光マップを作成したり、観光案内板を設置する。</li> <li>・船引駅や主要地点に設置し、国道を通る人の目につくようにしたり、来訪者の手に取りやすいようにする。</li> <li>・地元の方々に協力していただいて、瀬川地区が一带となって盛り上がるために、エコツアーを開催する。</li> </ul>
参考にした事例	<p>オホーツク観光イラストマップ(以下の URL)</p> <p><a href="http://www.okhotsk.org/news/pict/kankoumap1.jpg">http://www.okhotsk.org/news/pict/kankoumap1.jpg</a></p> <p>徳之島町ホームページ「観光ガイド」(以下の URL)</p> <p><a href="https://www.tokunoshima-town.org/chiikieigyoka/kanko/images/toku_kankomap.gif">https://www.tokunoshima-town.org/chiikieigyoka/kanko/images/toku_kankomap.gif</a></p>

Google Map にアクセスし作りたい範囲の地図を作成し、そこにピンをうつことで、自分だけのグルメや観光マップが作成することができる<sup>32</sup>。これを使って、瀬川地区の観光マップを作れば、ネットに掲載することも容易であるし、SNS を使った広報活動に便利であろう。次の図は、Google Map を使った瀬川地区の観光マップ「せがわめぐり」の一例である。

図表 30 Google Map を使った瀬川地区の観光マップ「せがわめぐり」



### ●観光案内板の設置

瀬川地区に観光案内板を設置する。また公共バスを利用し、観光地への送迎に使用したらどうか。瀬川地区にさまざまな観光地が整備され、観光案内板を参照しながら、いくつもの観光地を回るようになれば、公共バスの一日乗車券を作ってもよいかもしれない。

### ●観光マップの提案

図表 31、32 の観光マップのように、イラストや写真を記載し視覚的にわかりやすい観光マップを作成する。各観光地点(農業体験受け入れ施設、フラワーロード、聖石温泉、移ヶ岳など)や船引駅に設置し、来訪者の手に取りやすいようにする。瀬川地区内に観光案内所も設けたい。

また、福島交通バスが現状ほとんど利用されていないので、観光マップに観光地を回る経路図を記載することによってバスを有効活用することができる。

<sup>32</sup> シナプス・マガジンホームページ「Google マップでオリジナル観光マップを作ろう」(以下の URL)を参照。

図表 31 オホーツク観光イラストマップ



[出典]オホーツク観光ホームページ(以下の URL)  
<http://www.okhotsk.org/news/pict/kankoumap1.jpg>

図表 32 徳之島町観光イラストマップ



[出典]徳之島町ホームページ「観光ガイド」(以下の URL)  
<https://www.tokunoshima-town.org/chiikieigyoka/kanko/guide.html>  
[https://www.tokunoshima-town.org/chiikieigyoka/kanko/images/toku\\_kankomap.gif](https://www.tokunoshima-town.org/chiikieigyoka/kanko/images/toku_kankomap.gif)

## 5.6. 空き家や耕作放棄地の活用

図表 33 提案⑥空き家や耕作放棄地の活用

企画の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・瀬川地区における空き家を利用した「農家民宿」として活用する。</li> <li>・耕作放棄地を有効活用して、花畑にしたり、珍しい西洋野菜の生産を導入する。</li> </ul>
期待される効果	<p>瀬川地区には宿泊施設がないため、外部から人を呼び込み、交流人口を増やすためには、宿泊施設を設けることが必須である。</p> <p>「農家民宿」によって、農作物のアピールや副収入につながる。</p>
具体的な企画案	瀬川で付加価値の高い西洋野菜を栽培し、西洋野菜の産地にする。

### ● 空き家の活用

瀬川地区における空き家数は 35 軒である。今後空き家は人口減少の進行とともにさらに増加していくと考えられる。固定資産税の関係から今後も家は取り壊さず放置する住民が多いと考える。そこで私たちはこの空き家の活用方法について、宿泊施設として利用すること、地域の人々が集まることができる憩いの場として利用することを提案したい。

まず、現地調査を行った際に、瀬川地区には宿泊施設がなかった。今後、外部から人を呼び込み、経済を活性化させていくことを考えると、空き家を宿泊施設に利用することで経済効果が見込めると考えられる。そこで、宿泊施設にはさまざまな形があるが、瀬川地区の主要産業の農業を生かし、「農家民宿」として空き家を利用することを提案したい<sup>33</sup>。

図表 34 農家民宿の位置づけ

形態(呼称)	規模	経営者	客室延床面積	農林漁業体験の提供
農家民宿	大規模	農林漁業者	33m <sup>2</sup> 以上	提供する
	小規模	農林漁業者	33m <sup>2</sup> 未満	提供する
体験民宿	—	非農林漁業者	33m <sup>2</sup> 以上	提供する
民宿	—	—	33m <sup>2</sup> 以上	提供しない

[出典]農林水産省「4 農家民宿編」より引用。

[http://www.maff.go.jp/kinki/seisan/syokuhin/6ji/pdf/08\\_minsyuku.pdf](http://www.maff.go.jp/kinki/seisan/syokuhin/6ji/pdf/08_minsyuku.pdf)

<sup>33</sup> 農家民宿に関しては、以下のサイトが参考になる。

- ・農林水産省ホームページ「4 農家民宿編」

[http://www.maff.go.jp/kinki/seisan/syokuhin/6ji/pdf/08\\_minsyuku.pdf#search='%E8%BE%B2%E5%AE%B6%E6%B0%91%E6%B3%8A+%E5%96%B6%E6%A5%AD%E8%A8%B1%E5%8F%AF'](http://www.maff.go.jp/kinki/seisan/syokuhin/6ji/pdf/08_minsyuku.pdf#search='%E8%BE%B2%E5%AE%B6%E6%B0%91%E6%B3%8A+%E5%96%B6%E6%A5%AD%E8%A8%B1%E5%8F%AF')

- ・農林水産省ホームページ「農家民宿関係の規制緩和」(グリーン・ツーリズムの推進)

[http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose\\_tairyu/k\\_gt/pdf/siryoku2\\_101.pdf](http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/pdf/siryoku2_101.pdf)

民宿とは、「旅館業法」に基づく“簡易宿泊営業”を言う。その中に、農林漁業体験民宿(「農村休暇法」に定義される「施設を受けて人を宿泊させ、農林水産省令で定める農山漁村滞在型余暇活動に必要な役務を提供する営業」を言う)として以下のとおり、区分されている(図表 34 参照)。

農家民宿…農林漁業者によるもの

体験民宿…農林漁業者以外の個人・団体によるもの

客室延床面積が 33m<sup>2</sup> 未満の小規模な農家民宿は、一般の民宿に比べて開業しやすくなっている。その他に、農家民泊がある。

農家民宿を開業することによって自らの生産物をアピールをできること、農林漁業を行いながら副収入が見込めることが農家民宿を経営するメリットである。また消費者は普段できない農業体験を手軽にできる点が魅力である。

また、提案①の地域住民の交流の場「コミュニティカフェ」として、空き家をリノベーションして、再利用したカフェやレストラン、ゲストハウスを作るというもいいだろう。

このカフェやレストラン、ゲストハウスではできるだけ地元や福島産のものを使い、野菜など直売をしても良いだろう。地域内でこのような施設がたくさんできれば、提案③のエコツアーの企画・開催においても、休憩所として立ち寄る施設としてたくさんの利用客が見込める。

これに関しては、今回の現地調査では、空き家物件の視察や、その物件をリノベーションして店舗として、あるいは宿泊施設として利用できるかどうか、権利者との話し合いもできなかったので、具体的にどの物件をどのような目的で使えるかどうかは、次年度の調査課題としたい。

外部から人を呼び込み、交流人口を増やすには、宿泊施設を設けることが不可欠となる。この成功例として、伊達市霊山町にある NPO 法人「りょうぜん里山がっこう」を紹介したい<sup>34</sup>。「りょうぜん里山がっこう」は廃校活用の体験交流施設や、宿泊施設「ほっこ里」を運営している。このような施設が地域おこしにはどうしても欠かせないと思われる。また、2016年9月に県外避難した帰還ママたちの要望により、「伊達もんもの家」も開設している。子育て世代と高齢者に寄り添い、交流しているサロンで、こちらは「コミュニティカフェ」に近い機能を持っているようだ。

「りょうぜん里山がっこう」を運営する高野氏は、「霊山町には岩場がある。地元の人には何の価値もない邪魔な存在でしかないが、ボルダリングをやる人にとっては非常に魅力的な場所。地元の住民の高齢化により、草刈りなど地域の人々でやっていた共同作業ができなくなってきている。そこで、ボルダリングで若者を呼び込んで、地域を訪ねてくれた若者に協力してもらって、草刈りなどを実施していくというアイデアを考えた。」と語っている。地元では何の価値もないものが、よそ者からすれば宝の山に見えるという発想は、地域活性化に

---

<sup>34</sup> 「NPO 法人りょうぜん里山がっこう」ホームページ  
<http://date-satoyama.com/>

にとって必要な考え方だと思う。

### ●耕作放棄地の活用

耕作放棄地は、提案④で述べたように、フラワーロードを整備するという以外には、まだあまり出回っていない西洋野菜に特化して生産するというのはどうだろうか。希少価値の高い野菜で、しかも有機栽培を売りにして生産すれば、これから安心・安全が定着していくにつれて、より競争力のある野菜として高く売っていけると思われる。

例えば、田村市農産物直売所「ふぁせる たむら」では、「ロマネスコ」という西洋野菜が売られていた(写真 25)。草加市でも市の特産にしようと、数年前からこの「ロマネスコ」の生産を始めており、ようやく最近になって認知度が上がってきて、直売所でも高い値段で売られていると聞いた。

写真 25 「ふぁせる たむら」で販売されていた「ロマネスコ」



その他、耕作放棄地の田んぼで田んぼアートをしたらどうかという意見もあった。

### 5.7. 日常生活をサポートするボランティア活動

ここでは、瀬川地区の日常生活をサポートするボランティア活動として、子供を地域として育てる場として「こども食堂」、高齢者への日常生活サポートとして、軽トラ販売を提案したい。

図表 35 提案⑦ 日常生活をサポートするボランティア活動

企画の概要	・「こども食堂」の開設：ボランティアの方々によって、瀬川住民センターにて子供に地域の方々が少額で食事を提供する場を設ける。 ・移動型軽トラ販売の実施：高齢者に対して、軽トラで地元産の農作物などの販売を行う。
-------	--

期待される効果	子育ての不便さや、高齢者の買い物の不便さを少しでも緩和することができる。
具体的な企画案	・「こども食堂」の設置場所としては「瀬川住民センター」が考えられる。 ・軽トラ販売は「やってみっ会」の方々に協力いただく。
参考にした事例	「移動スーパー とくし丸」ホームページ(以下の URL 参照) <a href="http://www.tokushimaru.jp/">http://www.tokushimaru.jp/</a> ぎゅーとらホームページ「移動スーパー とくし丸」(以下の URL 参照) <a href="http://www.gyutora.com/torikumi/tokusimaru.html">http://www.gyutora.com/torikumi/tokusimaru.html</a>

### ●「こども食堂」の開設

「瀬川フェスティバル」後の保護者の方々との意見交換会の時に、瀬川地区の不便な点として「学童がないため、働きに行くことができない」という点を挙げる方が多かった。空き家で学童施設を運営することも検討したが、そのためには「放課後児童支援員」を2人以上配置されなければならない。そこで、ボランティアだけで運営することができる場として「こども食堂」を提案したい。

こども食堂とは「子供が1人で利用でき、地域の方たちが無料あるいは少額で食事を提供する場」である<sup>35</sup>。場所としては瀬川地区の多くの人が集まりやすい「瀬川住民センター」が良いと考えられる。瀬川地区の保護者が安心して子供を預けることができるだけでなく、瀬川地区すべての住民の方が集まれる場を提供するということを考えると、提案①に掲げた「コミュニティカフェ」と一緒に運用してもよいかもしい。子供から大人の方まで幅広い世代の交流が図られるというだけでなく、高齢者の方の居場所づくりにも貢献できると考えられる。

### ●移動型軽トラ販売の実施

「やってみっ会」では、軽トラに農作物を載せての販売を現在計画している段階だと伺っている。計画の段階では1つの場所に軽トラを停車し、「軽トラ市」を開催する案が挙がっているそうだが、ここでは「移動型軽トラ販売」を提案する。

瀬川地区での実地調査の際に、1人で買い物に行くことが厳しく日々の生活に困っている高齢者の方もいらっしゃる、という声を耳にした。現在では公共バスも運行されているが本数も少ないことから住民の利用率が低く、らくらくタクシーも存在しているがあまり利用されていない。困った際には近隣の方に買い物を頼んだりしているということであった。いわゆる「買い物難民」が今後ますます深刻になっていくことが予想される。

そこで、「やってみっ会」の方々に協力をお願いし、移動軽トラ販売を行うことで高齢者の

<sup>35</sup> こども食堂ネットワーク・ホームページ(以下の URL)を参照

<http://kodomoshokudou-network.com/>

こども食堂ネットワーク・ホームページ「こども食堂を作りたい人」(以下の URL)を参照

<http://kodomoshokudou-network.com/start.html>

方々がより便利に、そして安心して生活ができるのではないかと考えた。

現在考えている案としては、ボランティアとして協力して下さる方々は別の仕事をされており日中は忙しいと思われるので、販売を行う時間帯は夕方に行うのが良いのではないかと考える。

販売形式は移動型販売を行うことを瀬川住民センターや口頭などで住民の方にお知らせをし、単身世帯の高齢者のお宅などを中心に利用者を募集する。利用者は登録制で、決まった曜日に、利用登録者の自宅を訪問しながら瀬川で採れた野菜などを売っていく形式を考えている。

参考にした先行事例として、高齢者や山間地の住民の買い物支援を目指し、軽トラックで生鮮食料品や生活用品を販売する「移動スーパーとくし丸」(本社、徳島市)がある(写真 26)。移動スーパーとくし丸は、全国で移動スーパー事業を展開している。全国に約 700 万人とも言われる「買い物難民(買い物困難者)」を救うため、自動車に乗れない高齢者世帯のための、いわば地域の「見守り隊」としての役目も果たしたいとしている<sup>36</sup>。

写真 26 移動スーパー「とくし丸」



[出典]「移動スーパーとくし丸」(以下の URL)より引用。  
<http://www.tokushimaru.jp/>

福島県内でもスーパー「いちい」が移動スーパー「とくし丸」とフランチャイズ契約を結んで 2014 年から移動販売を開始している。「とくし丸」が「いちい」の商品約 300 品目を積み込み、曜日ごとに定めた市内のコースを回って販売するというもので<sup>37</sup>、県内では福島、郡山、須賀川の 3 市を中心に 7 台が巡回し、約 1000 人が利用しているが<sup>38</sup>、とくし丸の販売エリアに田村市は含まれてはいない<sup>39</sup>。この事業は商品 1 点に原則 10 円が上乗せされ、この

<sup>36</sup> 「移動スーパー とくし丸」ホームページ(以下の URL 参照)

<http://www.tokushimaru.jp/>

<sup>37</sup> いちいホームページ「移動スーパー とくし丸」(以下の URL 参照)

<http://www.ichii-yume.co.jp/tokushimaru/>

<sup>38</sup> 「福島の移動スーパー「とくし丸」、デビットカード OK、決済すると安否メール。」『日経 MJ(流通新聞)』2017 年 3 月 10 日、9 面。

<sup>39</sup> いちいホームページ「移動スーパーとくし丸の販売エリア」(以下の URL 参照)

<http://www.ichii-yume.co.jp/tokushimaru/area/>

売上の「+10円ルール」の内、スーパーと販売パートナー(移動販売員)が、それぞれ5円ずつシェアする仕組みになっている。

移動スーパー事業を全国で展開する「とくし丸」は本業としてこれを行っており、充実した品揃えと御用聞きの役割まで果たしているが、ボランティアではここまで本格的なものは難しいであろう。だが、瀬川で採れた野菜何種類か、またそばで作ったお菓子などを生産し販売することで地産地消を進めることもできるし、かつ高齢者の方々のニーズはあわせることで、地域コミュニティの活性化につながるのではないだろうか。

### 5.8. 獨協大学学園祭等における瀬川産の農産物・エゴマ等の販促活動

最後に、獨協大学学園祭「雄飛祭」において瀬川の野菜、エゴマ等を販売したり、エゴマの通信販売を行うことを提案する。

図表 36 提案⑧ 獨協大学学園祭等における瀬川産の農産物の販促活動

企画の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・獨協大学学園祭などにおいて、瀬川産の農産物を販売する。</li> <li>・商品価値の高いエゴマの通信販売を開始する。</li> </ul>
期待される効果	瀬川地区という場所がどこにあり、そこでどんな想いで野菜を作っているのか、エゴマとはどのような効果があるか等、県外にも市場を広げるために少しでも多くの人に認知してもらうことができる。
具体的な企画案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・獨協大学学園祭「雄飛祭」、国際環境経済学科・環境共生研究所共催で毎年、開催している「フクシマの未来を考える」、さらには「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo”」において瀬川産農産物の販促活動を行うことで学生にもっと関心を持ってもらう。</li> <li>・また、エゴマのインターネット販売を行う。</li> </ul>
参考にした事例	

#### ●獨協大学学園祭における瀬川産の農産物の販促活動

まず、「福島県に瀬川という場所が存在し、そこでどんな想いで野菜を作っている人がいるのか」、「エゴマとはなんなのか」、県外にも市場を広げるにはそういった情報を来場者に伝え、少しでも多くの人に瀬川産の特産物を認知してもらう必要がある。そこで、協力して下さる農家の方を募って、本学学園祭で野菜を販売するのは、すぐにでも実現できる可能性は高い。

販売に際しては、野菜の特徴や栽培方法、調理法などを記した紙を添付するなどすれば、さらに興味を持ってもらえる可能性がある。まず興味を持ってもらうことに重点を置き、購入特典としてちょっとしたエゴマの加工食品やそば等を配布するのもよい。瀬川で栽培されている「ヤーコン」や「ルバーブ」など珍しい野菜を売りに出しても話題性があると思われる。

エゴマについては知名度を上げる観点から、エゴマの効果について医学的な根拠や、テレ

ビで取り上げられた内容を宣伝しながら販売すると説得力が増すだろう<sup>40</sup>。ターゲットとしては特に女性、高齢者の方を中心にするとうまいだろう。なぜなら、エゴマに含まれる成分による効能で代表的なのが生活習慣病予防、アレルギー症状の緩和、そして美容効果が期待できるからである。高齢者の方は健康に気を遣う方が多いであろうし、女性は美容効果に惹かれるだろう。宣伝に使用するメディアの情報は田村市のエゴマを取り上げた番組と、直近のこれらの番組を紹介するとまいだろう。

東北復興支援プロジェクト「希望の環」によると、東日本大震災のあった2011年より、全国の大学・高校等の学園祭や文化祭等において学生・生徒が、ボランティア活動として被災した生産者が製造した缶詰などの販売を行う支援を行っており、2016年度は350校を超え、過去5年間で全国延べ900校以上もの大学・高校等が協力しているという<sup>41</sup>。

学園祭には学生や近隣住民の方々が多数来場する。そこで、被災地の商品を販売することで、全国各地で被災地の商品について知る機会ができる。さらに、その活動に参加するために大学生・高校生は、どのように調理したら美味しくいただけるかなど、まず自分たちが被災地の商品についてその特長を調べないと、来場者に勧めることができないので、自らが東北の商品について学ぶきっかけになる。このような活動は学生のアクティブラーニングとしても非常に意味があることだと思われる。

## ●エゴマの通信販売

次はエゴマの通信販売についての提案である。現在エゴマ油の通信販売についてインターネットで調べると、種類が非常に豊富で、安価なものが大量にヒットする。その中から瀬川で絞ったエゴマ油を消費者にどうやって選んでもらうかが大きな課題である。

外部に発信する効率が最も良く不特定多数の消費者に見てもらえるのはインターネット販売である。「エゴマ油」「通信販売」で検索し、上位にくるのはホームページがわかりやすく、かつ購買意欲をそそるものばかりである。

近年、エゴマブームにより品質に問題がある外国のエゴマ油が通信販売市場に出回ったケースがあり、純国産にこだわる消費者が多いと考えられる。そこで船引産のエゴマは品質の良さを前面に出し、有機無化学肥料栽培を謳って値段ほどの価値があるということを宣伝す

---

<sup>40</sup> 2016年2月1日放送の「私の何がイケないの？」の中で、肌荒れに悩むざわちんがえごま油を飲むだけ簡単美肌法！に挑戦したことが紹介されている(以下のURL参照)。

生活の泉ホームページ「ざわちんがえごま油を飲むだけ美容法でダイエット効果も！」

<http://www.gr8lodges.com/2235.html>

2017年4月18日放送の「林修の今でしょ！講座」の中で、「油の正しい摂り方検定2017」においてエゴマ油が取り上げられた。

<http://www.tv-asahi.co.jp/imadesho/backnumber/0078/>

<sup>41</sup> 東北復興支援プロジェクト「希望の環」ホームページ「学園祭などにおける「東北復興支援販売会」2017(以下のURL)を参照

<https://www.kibounowa.jp/topics-356.html>

る<sup>42</sup>。

## 6. おわりに

今回、私たち獨協大学地域活性化プロジェクト米山チームは、学内の全学部幅広く募集がかけられ、有志によって作り上げられたチームである。学部も違えば専攻している学問領域もさまざまであるメンバーが集まって、こうして福島県「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に関わることができたこと、そしてこの事業を通して、田村市船引町瀬川地区の皆さんと出会えたことを大変嬉しく感じている。

11月18・19日に現地調査で瀬川地区を訪れた際、住民の皆さんは、はじめて会う私たちに快く受け入れてくださった。船引駅から最初に訪れた「瀬川フェスティバル」では、小学生の子供とたちと一緒に豚汁を調理し、餅つきも体験させてもらい、「やってみっ会」の方の手打ちの新そばと一緒に、体育館でみんなでご馳走になったのはいい思い出である。そこで出会った住民の皆さんをはじめ、ヒアリング調査で訪れた農家の方々、農業委員の皆さん、区長さん、田村市協働まちづくり課の職員さんなど、何もわからない私たち「よそ者」が事前に準備したたくさんの質問項目の一つひとつ丁寧に回答してくださった。一人ひとりが地域に対して大きな愛情を持っており、住民同士の団結力がある温かい地域であると感じた。その団結力が表れていたのが「やってみっ会」や「支え合う地域づくりチーム瀬川」などの組織である。瀬川地区をよくしていきたいという熱い想いがこうした組織を生み出し、自ら行動して地域を変えていこうとする姿勢がひしひしと伝わってきた。

私たちも住民の皆さんの熱い想いに応えられるように、「よそ者・若者」の視点で、前提条件なく本気で実施したいと思った提案をさせていただいた。もしかすると、一見しただけで却下されてしまう提案もあるかもしれないが、1つでも2つでも実効性のある提案を次年度実証実験として実現したいと考えている。

本来であれば、これらの提案をまとめた段階で、もう一度瀬川地区を訪ねて、提案している企画内容について住民の皆さんと議論して、優先順位を付け、あるいは取捨選択をして本調査報告書には、次年度の実証実験として具体的に実施計画を立てたものだけに絞って掲載すべきであった。しかしながら、本事業の応募が8月末、採択されたのが9月になったために、夏休み中に現地調査に入れず、メンバーの日程調整の結果、11月中旬ようやく現地調査の運びとなった。このために、スケジュール的に非常にタイトになってしまい、提案企画について瀬川地区の方々と議論できなかったのは残念であった。したがって、2018年度は早い段階で実証実験に応募し、採択いただいた上で、まず本調査報告書に提案している皆さんの企画を瀬川地区の方々の意見を伺って、再度吟味して優先順位を付けて、実証実験に移って行きたいと考えている。

この言わば、寄せ集めのメンバーで結成した地域活性化プロジェクトチームではあるが、

---

<sup>42</sup> 毎日、大きじ1(15g)のエゴマ油を飲むとして、船引産のエゴマ油 2,879円/280gは18日分あるので、1日当たり約160円の計算である。

福島県の中山間地域の集落に現地調査に入って、地域活性化策について考えて提案することで、少しでも住民の皆さんのお役に立ちたいという想いは共有できたと思う。4年生が多く、この3月には卒業してしまい、3年生も就職活動が始まるため、次年度の実証実験を後輩に引き継いでいくことが私たちのチームの差し当たりの課題である。しかし、一緒に活動した1、2年生(田村市出身の1年生を含む)のメンバーもいるので、彼らがこの米山チームの熱い想いを引き継いで新たなメンバーを募って、ぜひ実証実験につなげていてもらいたいと考えている。

最後に、本調査をするにあたり、瀬川地区代表区長の松本様、田村市地域づくり推進員の佐々木様、田村市協働まちづくり課の皆様、そして「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の運営事務局となっている福島県企画調整部地域振興課の皆様など、多くの方々にご協力いただいた。お世話になった多くの方々に、厚く御礼申し上げたい。

写真 27 石沢多目的集会場の近くから移ヶ岳を臨んで記念撮影

